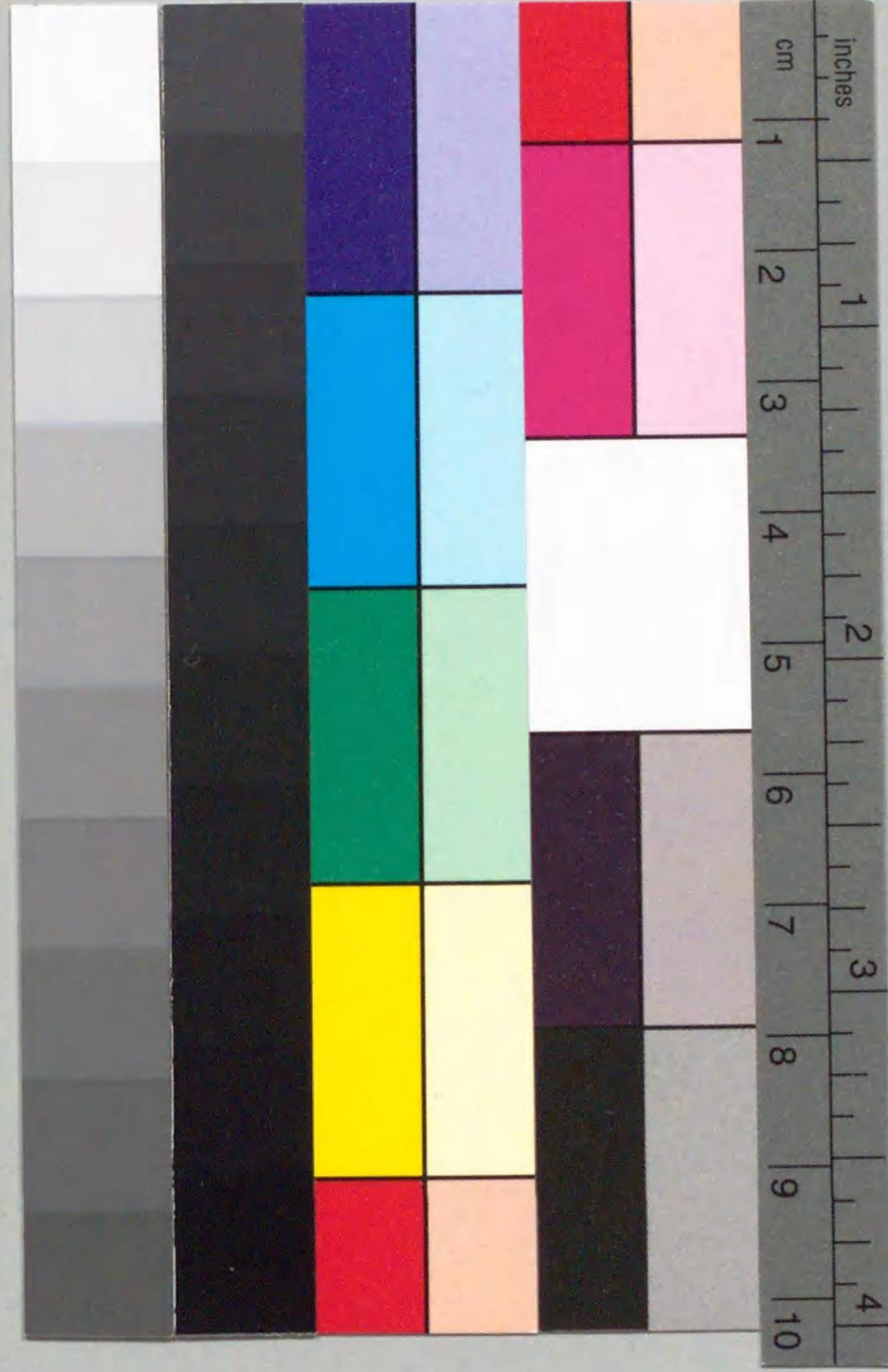


兄弟いとこものがたり

— 吉田甲子太郎作 —



新潮社版



兄弟いとこのものがたり

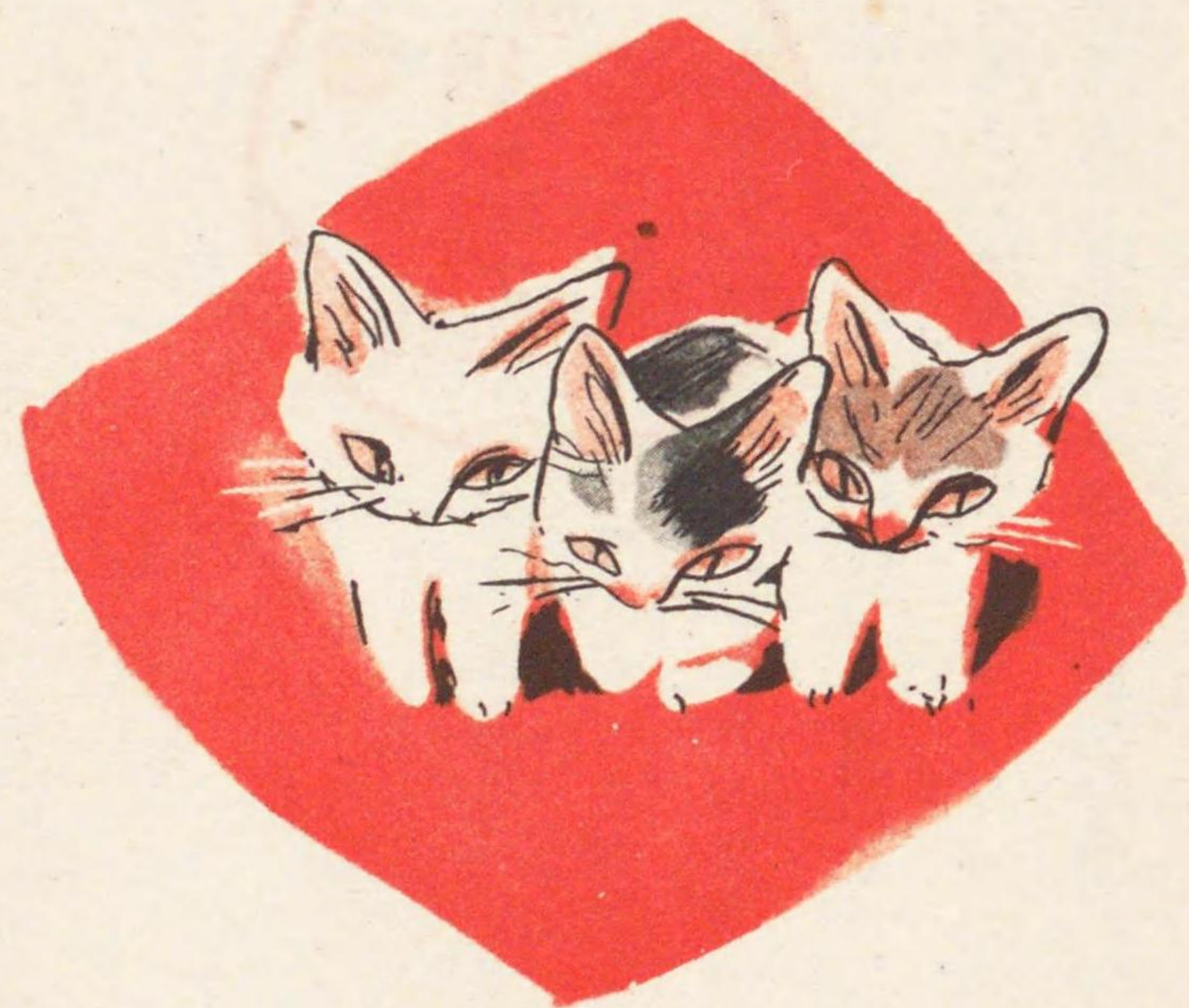
吉田甲子太郎作



新編 叢書

兄弟いとものがたり

吉田甲子太郎作



新潮社版

48

Y-7



813908

作者のことば

ヤマネ・ヒロシは国民学校五年生だ。中学二年の兄と国民学校三年生の弟がある。おとうさんの兄弟が五人、おかあさんの兄弟が三人、つまり、おじさん、おばさんが六人もあるから、いとこたちのかずは、ちよつと、かぞえきれない。このヤマネ一家のこどもたちのあいだに、毎月、何かしら事が起こる。事件のなかへおとなが顔をだすこともある。これから、毎月、それを報告していこうというのである。どんないたずらものがでてくるか、どんなよわ虫がでてくるか、どんなかしこい子がでてくるか、たのしみにしていくのださう。

一九四七年一月

吉田 甲子太郎

もくろく

作者のことば……………一

一月・ヒロシの元旦……………六

二月・ピアノと算数……………二四

三月・ネコの巣……………三六

四月・自転車のゆめ……………五五

五月・約東……………七四

六月・こわれたハモニカ……………九一

七月	・ タロウのるすばん	一〇六
八月	・ 海	で.....	一三六
九月	・ にわか雨	一四三
十月	・ ひげのおじさん	一六〇
十一月	・ 星とお金	一七九
十二月	・ 雪の丘	二〇一

装本・さしえ

河目 悌 二

兄弟いともものがたり

ヒロシの元旦

六じょうのヘヤのまんなかに、兄弟のツクエが三つよせあわせておいてある。夜は、一つの電燈で、まにあわせるためである。イスからのびた六本の足があつまるところに、かな網をかぶせた小さな火ばちが一つ。火ばちにはタドンが二つ、炭がひとかけはいつているだけだから、ヘヤはちつともあたたまらない。

中学二年のタカシは、字引きをひいては、英語の教科書に、エンピツで書きいれをしている。初等科三年のフカシは童話の本に夢中だ。ふたりとも、ヘヤの寒さも、ほかの人間がそばにいることも、すっかり、わすれているようすだ。

初等科五年のヒロシは、なまあくびをころしながら、あたまをあげた。算数の本をあけてから、まだ、十五分とたたないのだが、どうにも身がはいらぬのだ。けれどもにいさんと弟とが、それぞれ、自分のことに熱中しているのを見ると、話しをしかける気にはならない。本はあけっぱなしにしたまま、そつと、ヘヤをでた。

そとを見ると、まだ、日があたっている。さつき、おやつのおイモを食べたばかりだから、晩ごはんまでは、だいぶ、あいだがあるはずだ。それまで、どうやって、ひまをつぶそう。にいさんもフカシも、あそびあい手になってくれそうではない。

しかたがないから——そんな氣もちで、ヒロシは、かかとのつぶれたズツクのクツをつっかけて、門からでようとした。

「ヒロシさん、どこへいくの。」

台どころで、シチリンに火を起こしていたおかあさんが声をかけた。

「ええ、ちよつと——。」

ヒロシの返事はあいまいだった。

「ご用でなかつたら、少しマキをわってちょうだい。」

しかし、ヒロシはマキわりはしたくなかった。ポケットへつつこんだみぎ手の指は、メンコのかずをかぞえていたのだった。

「学校のこと、ちょっとコンドウ君とこへききにいくなだよ。」

ヒロシは、うそをついた。

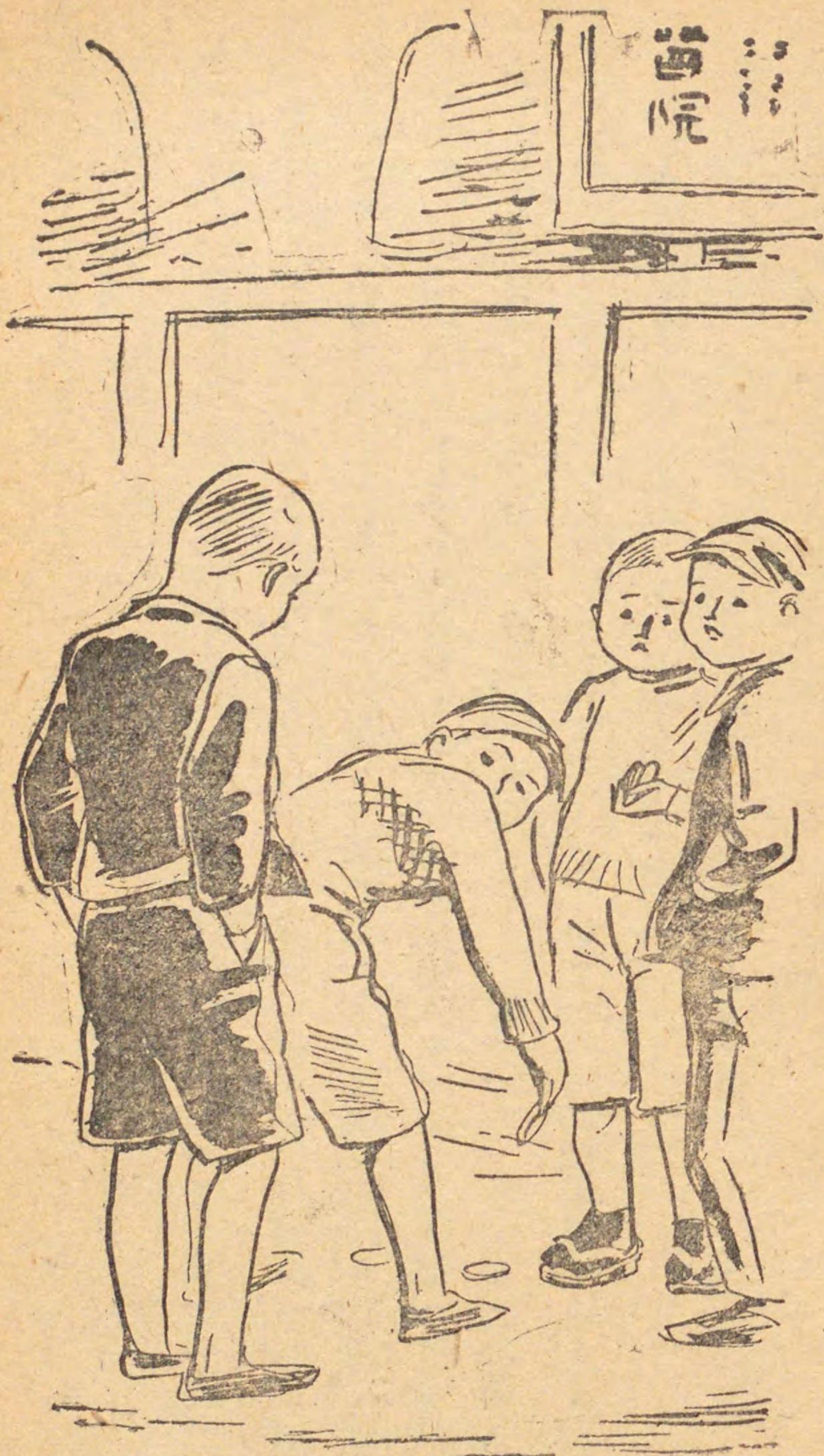
「ああ、さう。なら、いいの。」

おかあさんは、すぐ、だまされてしまった。

やっと、そとへでると、ヒロシはかけだした。

いつも、メンコをすることもがあつまる場所はきまつている。オカヤマ医院のコンクリートのヘイのまえだ。ここは、日あたりがよくて、風があたらないうえに、道がかたくて、霜どけがしないので、メンコにはもってこいなのだ。

ヒロシが、そこへきてみると、思ったとおり、いつものなかまが三人あつまっていた。もう、すっかり、手をどろだらけにして、しきりに、勝負をあらそっているところ



るだ。みんなの目が変に光っている。ヒロシが、そばへきて立っても、すぐに、ことばをかけるものはだれもなかった。

ヒロシも、だまって見ていた。

デンキチという同級生が、スミノ君という三年生のメンコをねらって、自分のメンコを、ちからいっばい、パツとたたきつけた。スミノ君の大きなメンコが、デンキチの小さなメンコの風にあおられて、いくじなく、黄いろいボール紙の腹をだして、ひっくりかえしになった。デンキチは得意そうに、その大きなメンコを自分のポケットへ、しまいこんだ。スミノ君は、くやしそうな目をして、ちよつと、デンキチの顔を見てから、もそもそと、べつのメンコをだした。見ているヒロシの胸のなかを、「いやだなあ。」という氣もちが、ふいっと、かすめてとおった。

だが、そのとき、デンキチが、ヒロシのほうを、ふりかえった。

「はいるのかい。」

ヒロシは、だまこて、うなずいただけだった。そして、メンコをとりだして、しゃがみこんだ。両手で、できるだけ地面に強くおしつけて、わきから、風のはいるすきがないようにするためだった。それから、はじめてきいた。

「だれのつぎ。」

「スミノのつぎだ。」

デンキチは、答えながら、地面におかれた三つのメンコのうち、どれがいちばん「いかせ」やすいか、ゆだんのない目で、しらべていた。

ヒロシも、やがて、すべてをわすれて、メンコの勝負に、熱中していた。

十二月のうすれ日が、すっかりくれて、四人の少年たちが、肩をすばめて、ちりぢりにわかれたときには、ヒロシのポケットには、一枚のメンコも、のこっていないかつた。負けて、みんなデンキチにとられてしまったのである。

門をはいると、「エイッ！」という兄さんの声がきこえた。のぞいてみると、タカシ

が、台どころのまえで、ナタをふりあげて、マキをわつてるところだった。げんか
んをあがるとき、また、「エイッ！」といふ声が、うしろからきこえてきた。ヒロシ
は、その声におわれるような氣もちで、茶の間へはいった。茶の間では、電燈の下で
フカシが、おとうさんのすうタバコをまいている。おかあさんは、むろん、台どころ
で、晩のごはんごしらえである。

ヒロシは、だれにも、なんにもいわずに、こそこそ、こどもベヤへ、はいった。

タカシのツクエも、フカシのツクエも、きちんと、かたづいているのに、自分のツ
クエの上には、算数の本とノオトがひろげっぱなしになっていて、エンピツやナイフ
が、だらしなく、ころがっている。

ヒロシは、ひらいた本にヒジをついて、うすやみのなかで、あたまをかかえた。な
んとも、やりきれない氣もちなのだ。

メンコは、学校からも、うちからも、かたく、とめられている。おかあさんにうそ
をついて、そのとめられているメンコをやつて、めちやくちゃに負けてかえつてきて

みると、うちじゅうの人は、みんなはたらいしている。あかるい顔をして、たのしそら
に、せつせとはたらいしているのだ。

ヒロシは、みじめな氣もちだった。どうしていいかわからない氣もちだった。

ヤマネ・ヒロシは、こないだまでは、こないけない少年ではなかった。はりあい
よく、勉強もし、あそびもする、すなおな、あかるい少年のひとりだった。ところが、
十月のおわりに近いある日に、ほんの、ちょっとしたことが起こってヒロシの心
をきずつけた。

学校の教室では、ヒロシの席のうしろにババ・ゲンキチの席があった。先生がコク
バンにむかって字を書いているときに、ゲンキチが、放課後（ほうかご）野球をやる
うという相談を持ちかけた。授業（じゅぎょう）時間ちゅうのことだから、ヒロシは、
小さい声で、「あとで。」と答えて、あいてをだまらせようとした。それがきこえなか
ったものか、ゲンキチは、ヒロシの肩をついて、うしろをむかせようとした。しかた

なしに、ヒロシは、ふりかえって、少し大きな声で、もういちど、「あとで。」と、ゲンキチをたしなめた。とたんに、先生が、ひょいと、こっちをむいた。

「ヤマネ、何をしてる。」

ヒロシには弁解（べんかい）のことばがなかった。しいて弁解しようとするれば、ゲンキチが自分の肩をつつついたことを、いつけなければならぬ。けれどもそれは、どんなことがあっても、してはならないことだ。そんなことをすれば、あしたから、みんなにけいべつされるばかりだ。

しかも、おりあしく、先生の虫のいどころがわるかった。ヒロシは、全生徒のまえで、さんざんに、しかられた。「先生が見ていないと思って、うしろをむいて話しをするなんて、ひきょう者だ。」とまでのしられた。

ヒロシは、くちびるをかんだ。自分がわるいのではないというはらがあるだけに、よけい、くやしかった。だから、このために受けた心のいたでは、かなり、ふかかった。先生をうらむ氣もちが、やがて、先生をさらう氣もちになった。学校がおもしろ

くなくなり、勉強に氣乗りがしなくなった。いわば、最初に受けたきずにバイキンがはいって、うみただれてきたようなものだ。

フカシがこどもベヤをあけて、くらしいのを、ふしぎに思った。

「にいちゃん、いるの。」

ヒロシは返事をしない。

「にいちゃん。」

ヒロシはゴトリと立ちあがった。

「なんだ。いたのか。ごはんだよ。」

食事がすんで、おとうさんは、わきにおいた箱からタバコをとりあげた。

「ホウ、だいぶたくさんまけたね。だれがまいてくれたんだね。」

「ぼくです。」

フカシが得意になって答えた。

「そうか。ありがとう。うん、なかなか、よくまけてるぞ。」

そんな話しも、ヒロシには、なんだか、自分にあてつけられているような気がするのだった。ヒロシは、座(ざ)を立とうとした。

「ヒロシ、ちょっと待てよ。きょうは、みんなに話しておきたいことがある。うちではね、戦争まえまでは、毎年、元旦(がんとん)に、うちじゅうで、お年だまのやりとりをすることにしてたもんだ。うちの家族は、いま、五人だから、らいねんは、だれでも、四つずつお年だまがもらえることになる。そのかわり、だれでも、ほかの四人にださなければならぬわけだ。タカシが、国民学校の一年生だったときに、最後のお年だま交換(こうかん)をやったつきりだから、ヒロシとフカシは、らいねんがはじめてのなかまいりだ。ことわっておくが、自分でこしらえた品物か、自分のおこづかいで買ったものでなくちゃいけない。むろん、自分の貯金箱(ちよきんばこ)の

金は、みんなだしてもいい。そんなことは形式的(けいしきてき)で、むだなことだという人もあるかも知れない。けれども贈(おく)りものをするということは、人が自分のことばかり考えて暮らしているものではなくて、愛する人たちのために暮らしているものだということを、形にあらわす一つの方法なんだ。だから、年に一ぺんくらい、こういうことをするのは、いいことだと、おとうさんは考えているんだ。日本は、戦争に負けたあとで、まだ、ろくに品物もない。それはわかつてる。そこを、なんとか、くふうして、あいてをよるこばすものを考えるのも、おもしろいじゃないか。どうだ。みんな、さんせいしてくれるかな。」

「さんせいッ！」

フカシが一番大きな声をだした。

「たのしみだなア。」

タカシも、にこにこしながら、そういった。

おとうさんのお話しをきいているうちに、ヒロシは、たぎやかな正月元旦の朝の食

卓（しょくたく）が目に見えるような気がして、久しぶりに、ほのぼのとした、なごやかな心もちになった。しかし、自分には、その、うれしいまどいに加わるねうちが、ないような気がして、フカシのように、無心に、「さんせい。」と、どなれずいた。

「ヒロシはどうかかな。」

ヒロシには、おとうさんが、とくにやさしい声で、きいてくださったような気がしてならなかった。そして、急に胸がせまって、ものをいうと、くちびるがふるえそうな気がした。

「やります。」

ヒロシは、なるべく短く、そう答えた。

こどもたちが、自分のハヤへいってしまったあとで、おとうさんとおかあさんが話しをしていた。

「なア、おかあさん。ヒロシは、たしかに、どうかしている。こどもの心はむづかしいものだ。なるべく、こごとをいわずに、氣をつけてやってくれ。」

「ええ、あたしも心配しているんです。どうも、わるくなる一ぼうのような気がして。」

「もうすこし待とう。こごとをいわずになおれば、これにこしたことはないからな。」

ヒロシは、おとうさん、おかあさん、タカシ、フカシの四人にあげるお年だまを、全部、自分の手でつくろうと決心した。一つは、おこづかいを、メンコを買うために、たいてい、つかってしまって、貯金箱が、ほとんど、からだだったからでもある。

どんなものをつくろう。それを考えはじめた日から、ふしぎなもので、ヒロシの毎日、はりあいができてきた。日ましにきげんはよくなり、口かずもきくようになってきた。メンコは、ふつつりやめた。とくに、タカシとフカシとがこどもベヤにいないと

き、そこにこもって、せつせと何かしていることが多かった。学校での態度(たいど)もかわってきた。自分がよい生徒なのに、先生がわるい生徒だと思いちがいをしているのなら、それが先生にわかるようにすればよいのだ。いや、たとえば、だれがなれと思おうとも、わるい生徒はわるい生徒、よい生徒はよい生徒だ。いつかは、わかる。だれにもわからなくとも、神さまにはわかつてはいるはずだ。そんなふうを考えるようになってくると、先生にたいするうらみも、うすれてきた。教室でものをきかれるとき、ヒロシの答えは、これまでよりも、キビキビしていた。

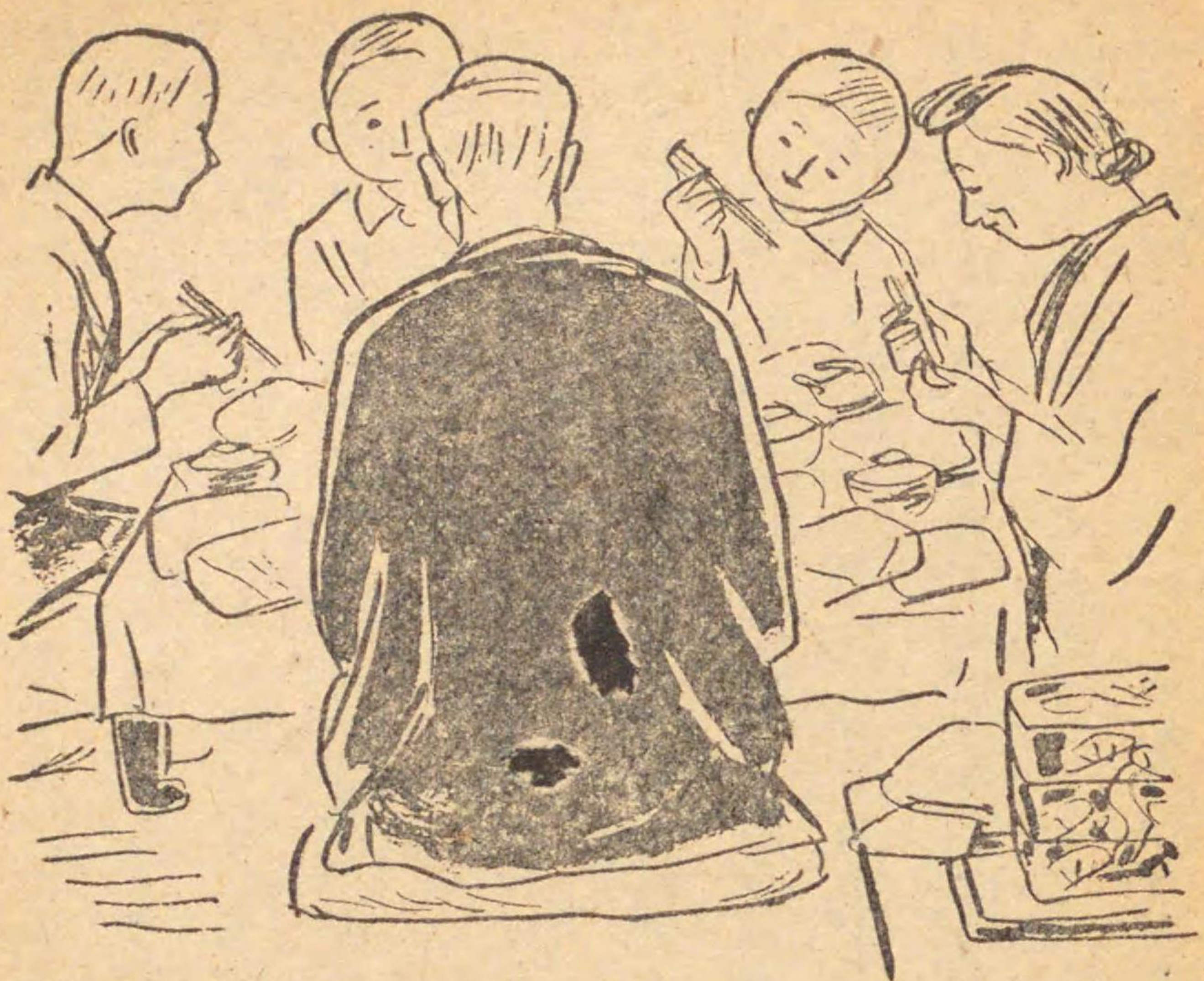
「よし、ヤマネのいうとおりだ。どうだ、みんなもわかったか。」

そんなとき、先生がヒロシを見る目つきも、まえとはちがってきた。先生が、もう自分のことをわるい生徒だと思っていないことが、ヒロシにもよくわかった。

ある日、ヒロシは兄に、うちじゅうの人の、名まえのカシラ文字を教えてくださいとたのんだ。おとうさんが Noboru (ノボル)、おかあさんが Ritu (リツ)、あとは Taka-
gi (タカシ) に Hiroshi (ヒロシ) に Hukasi (フカシ) だから、カシラ文字は N・R・

T・H・H ということになる。自分と弟とがおなじカシラ文字なのは、ぐあいかわるいといったら、Hi, Hu と書けばよいと教えてくれた。

うちの人たちも、ヒロシが、どんなお年だまを準備(じゅんび)しているのか、だれも知らなかった。ただ、おとうさんとおかあさんは、お年だま交換の話をしたあくる日からヒロシが、目に見えて、よい子になっていくのがうれしかった。ずいぶん、いそがしそうなのに、うちのてつだいも、なかなか、よくする。



元旦の朝がきた。ヤマネ家の祝いの食卓は二十の贈り物の紙づつみをのせきること
はできなかつた。紙につつんでないものもあつた。見ごとなボタンの花を大きくいっ
ばいにかいた、めずらしい模様（もよう）の、大きなタコがそれだつた。タコは二つ
あつたので、ヒロシとフカシは、それが、自分たちのお年だまだということをしるが
知つた。ヒロシのまえには、小さな、ほそながい、四本の紙づつみがのせてあるだけ
だつた。

「おめでとうございます。」

おトソがすむと、おぞうにのまえに、お年だまを贈りあうことになつた。

みんな、ヒロシからのお年だまを、一番にあけて見た。それは、きれいな、ひとそ
ろいづつのハシだつた。木は、おり箱をこわしたスギだつたが、かどにちゃんと、ま
るみをつけて、がっちりできてゐる。紙ヤスリでみがきあげて、あたまにはそれぞ
れのローマ字がほつてゐる。

「いいなア。おにいちゃん、自分で、これこしらえたの。」

フカシが、ハシをバチバチやりながら、きいた。

「うん、なかなか、よくできてる。けさは、これで、どうにを祝うことにしよう。――
だが、ヒロシ、自分のがないね。」

ヒロシは、声に應（おう）じるように、にっこりして、食卓の下から、自分の新し
いハシをとりだした。あたまに、ちゃんと田口というカシラ文字がついていた。

うちじゅうの人が、自分のこしらえたハシで食べているのだと思うと、ヒロシは、
ことしのおぞうには、とくべつに、うまいような氣がした。

ピアノと算数

「つるとかめト、ソノ足アワセテ百五十本アリ。シカシテ、つるノ数ハかめノ数ヨリ十二多シトイウ。つる、かめ各々ノ数ヲ求ム」

1

コロクは、もう一時間のうえもおんなじような算数の問題と、とつくみつづけてきたので、あたまがつかれていた。うっかりするとツルが四本足で、カメが二本足だなどと考えちがいをしそうだった。

かれは、ため息をして、エンピツをなげだした。まだ五問題ほど残っている。きのうの土曜日にやっつけてしまえばよかったと、つくづく思う。本箱の上の時計はもう一時半になっている。三十分たてば、いとこのヤマネ・ヒロシが遊びにくる約束の時間だ。いそいで、かたづけてしまわなければならない。

コロクは、また、エンピツをとりあげた。そのとき、ふいと、ピアノの音がきこえてきた。さっきから、妹のナナコがひいているのだ。音階練習にあきて、いろんな唱歌を、ポツン・ポツンと、あまだれ調子でやっている。「証城寺（しよじょうじ）のタヌキばやし」、「肩たたき」からはじまって、「リンゴの歌」まで、でてくる。まだ、ならいはじめだから、じつに、たどたどしい。コロクは、ポン・ポンというまのびのしたその音が耳についてたまらなくなった。もうやめてくれればいいと思うが、なかなか、やめない。いらいらしてきて、とても、算数の問題など考えられなくなった。かれは、ふんぜんとして、立ちあがった。

あらいあし音をさせて、廊下を歩いていくと、妹のヘヤのドアを、ぱんとあけた。「やめないか。」

いきなりどなった。

ナナコは、イスごと、くるりと、こっちをむいた。あっけにとられた顔だ。

「どうしたの、そんなこわい顔をして。」

「どうしたのじゃない。うるさくて、勉強も何もできないじゃないか。」

「あら、おにいちゃま、勉強していたの。でも、きょうは日曜よ。」

「日曜に勉強しちゃうわるいということないだろう。」

「そんなことないわ。だけど、日曜にピアノをひいちゃいけないってこともないでしょう。」

ナナコは四年生だが、六年生のコロクにいさんに負けてはいない。妹をしかりつけるつもりできたコロクは、旗いろがわるくなつたので、よけい、ぷりぷりしだした。

「日曜だって月曜だって、人が勉強しているときに、へたくそなピアノで、じゃまをするのは、わるいにきまつてるさ。すぐやめてくれよ。」

「あたし、おにいちゃまの勉強のじゃまをするために、ピアノ、ひいていたんじゃないよ。」

「わよ。」

「じゃア、なんのためにひいていたんだい。」

「たのしみにひいていたんだわ。」

「自分のたのしみのために、人の勉強のじゃまをしてもいいっていうのかい、ナナコは。」

ここで、ナナコは、ちょっと、返事につまった。すかさず、コロクは、かさにかかっていたいかたをした。

「もうじき、ヒロシ君がくることになってるんだ。ぼくは、それまでに宿題をかたづけなきゃならないんだよ。いいか、ピアノひくんじゃないぞ。」

だが、ナナコは、そんなことで、へこたれるような少女ではなかった。りくつっぱいでは、このニシカワのうちでも有名だった。これでよしと、氣をよくしてひきあげようとするコロクのうしろから、ナナコのことばがくいついてきた。

「おにいちゃま。」

それは、立ちどまってふりかえらずにはいられない声だった。

「おにいちゃまが勉強したいときには、いつでも、人のたのしみのじゃまをしているの。」

思いがけない論法(ろんぽう)だった。コロクは、妹のいったことばを、かみしめて考えてみなければならなかった。——妹は、算数の勉強をすることのほうが、たのしみにピアノをひくことよりも、たいせつだということをわすれている。さうだ——

「ナナコ、たのしみにピアノで『リンゴの歌』をひくことと、算数の宿題の勉強をすることと、どっちが、たいせつだと思う。」

「おにいちゃまには、算数のご勉強がたいせつでしょう。でも、ナナコにはピアノをひくたのしみのほうが、たいせつだわ。おにいちゃまは、算数で、ナナコのピアノのじゃまをするつもりなの。」

まったくの逆襲(ぎゃくしゅう)である。これでは、どっちが、しかられているのかわからない。

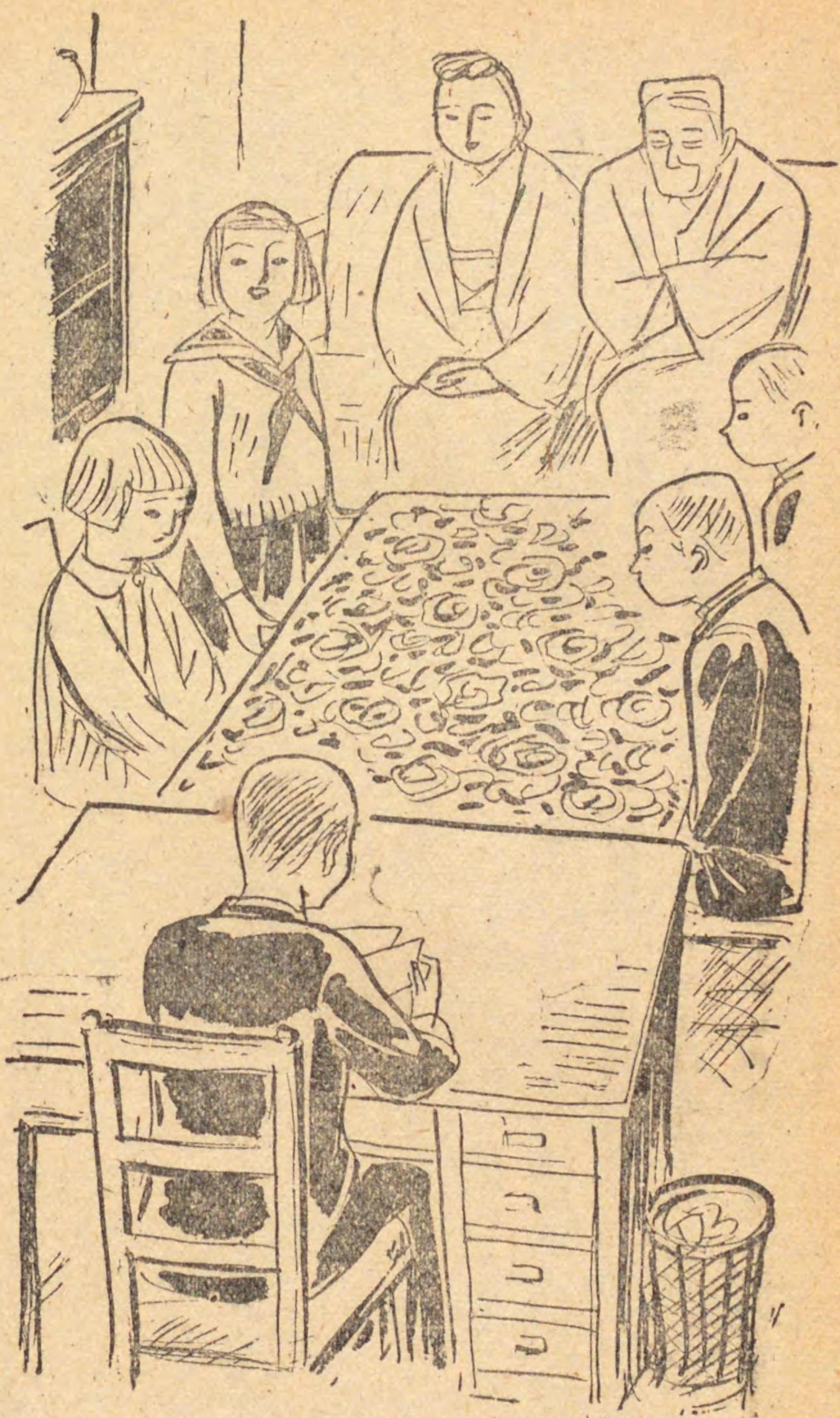
だが、コロクは、さっそく、うまい返事をする事が、どうしてもできない。はやくいえば、やりこめられたのだ。このままひきさがるわけにはいかない。まして、あいては妹だ。そう思ったとたんに、コロクの声がバクハツした。

「なまいきうな。」

同時に、コロクのみぎの手がナナコのほっぺたへ飛んで、ナナコがわっと泣きだした。

2

午後三時から、「ピアノと算数事件」の裁判(さいばん)が、中学五年生のヤスケにいさんのへやでおこなわれることになった。裁判長はヤスケにいさん、原告(うったえてた人)はナナコ、原告の弁護人は女学校二年生のアヤコねえさん、被告(うったえられた人)はコロク、コロクの弁護人は、約束どおりコロクのところへ遊びにきたヤマネ・ヒロシ、こういう顔ぶれだった。



このごろのヒロシは、おかあさんにかくれてメンコをして遊んでいた時分とは、うってかわって、元氣ではりきっていた。

ヒロシは、まず、コロクのヘヤで、いろいろと打ちあわせをした。事の順序（じゆんじよ）をすっかりきいてしまってから、ヒロシはたずねた。

「ナナコちゃんの一番よくなかったのは、どこのところだろうね。」

「なまいきなことさ。」

「うん。」

ヒロシは、考えこんだ。どうも、被告のほうが不利なようだ。

この弁護士は骨がおれるぞ。

ニシカワ家はヒロシのおかあさんの里（さと）だが、なかなか金持ちだ。だから、ヤスケ、アヤコ、コロク、ナナコの四人兄弟は、それぞれに自分のヘヤを持っている。ヘヤには、勉強ヅクエのほか、お客用の小テーブルがあって、革（かわ）ばりのイスが三つおいてある。こどものヘヤにだって、ちゃんと、ふかふかしたジュウタンが、

しいてあるんだから大したものだ。

ヤスケのヘヤは、もう、支度が萬事ととのつていた。本箱の上の花ビンに白いウメの小枝が一本さしてある。そこから、いいにおいが静かにただよってくる。

勉強ヅクエのむこうがわに、ヤスケが制服をきて陣どっている。それにむかって右が原告席、左が被告席である。原告と被告は、それぞれ弁護士につきそわれて、小テーブルの前のイスにかけた。少しはなれたところにイスをおいて、おとうさんとおかあさんが、ならんですわっている。傍聴人（ぼうちょうにん）（裁判のようすを見にくるいっばんの人）というわけだ。この傍聴人、たのしそうに、にこにこしている。

ヤスケが、せきばらいをして、イスから立ちあがった。

「これから、『ピアノと算数事件』のニシカワ家裁判をひらきます。どこまでも民主的に、じゅうぶん議論をつくし、神の加護（かご）によって、公平な判決に到達したいものと考えます。」

裁判長の顔とことばとが、あまり、くそまじめだったので、原告の弁護人のアヤ

コが、くすりと、わらい声をもらした。

「厳粛なるべき法廷で、不謹慎な態度はつつしんでいただきます。」

すかさずヤスケがそうだったので、こんどは、みんながわらいだしてしまった。裁判長の顔も、くずれていた。しかし、その顔はまたすぐに、じゅうぶんな威厳をとりもどした。

「みんな、まじめにやるんでなきゃ、ぼく、やめるぜ。」

「さうだ、こういうことは、やる以上は、まじめにやらなきゃ、なんにもならんよ。」
おとうさんが助け舟をだした。

その後は、おわりまで、厳粛な空気が、この法廷を支配したのであった。

はじめにナナコが、コロクが自分のヘヤにきてから、いろいろことばのやりとりがあつて、とうとうホツペタをぶたれたところまでのことを、かなりくわしく話した。

「それで、まちがいありませんか。」

ヤスケにいさんが、まるで他人のような声で、コロクにきいた。

コロクは、ナナコの話しに、うそはないと思つたが、ピアノの音が耳について、いららしてこまつたときの氣もちが、裁判長にわかつてもらえないのは、不公平だと考えた。

「まちがいありません。しかし、『リンゴの歌』のピアノが、どのくらい勉強のじやまになつたかというのを、少しお話ししちゃいけないでしょうか。」

「あら、あたし、『リンゴの歌』ばかり、ひいていたんじゃないわよ。」

「原告はだまつて。裁判長の許しを得ないでかつてに口をきいてはいけません。——被告は、自分のツクエを立て、原告のヘヤへいくまでの氣もちを話したいというのらしいが、それは、裁判の公平のために、きいておく必要があると思ひます。話してください。」

そこで、コロクは、雨だれのような、へたくそなピアノで「証城寺のタヌキばやし」をひかれることが、「ツル・カメ算」を考えている人間にとって、どれだけ、じやまになるものかということ、できるだけ、大げさに話した。

ナナコは、にくらしそうな目をコロクにさんの顔からはなさずに、そのいいぶんをきいていた。ところが、にくらしいと思ひながらきいていたのにもかかわらず、それをきいていると、自分のヘヤをあけたときのコロクにいさんが、なぜ、あんなこわい顔をしていたのか、はじめて、わかるような氣がしてきた。「なるほど、いきなり、あたしをどなりつけたのもむりはなかつた。」そんな氣がしてくるのである。

「被告のいいたいことは、それだけです。それでは弁論にはいります。原告の弁護人からお願ひします。」

アヤコが立ちあがつた。制服のセーラーを着て、きびきびした弁護人ぶりだ。

「あたしは、二つの点で被告のほうがるわいと思ひます。第一の点は、被告が、ナナコちゃん——いいえ、その——原告にピアノをやめることをたのめばよかつたのに、はじめから、どなりつけたことです。わけを話して、静かにたのめば、この事件は起こらずにすんだことだろうと思ひます。第二の点は、被告が原告をなぐつたことです。文明國の紳士（しんし）たるものが、淑女（しゅくじょ）をなぐるということは

どういうときでも、許されません。まして、被告コロクは、原告ナナコをいたわらなければならぬ兄なのです。被告は、原告に手をつけて三べんあやまって、來週の日曜には、ヒロシさんのうちへ原告を遊びにつれてゆくべしという判決をお願いします。」

ヒロシは、アヤコの弁論に、けおされた。まるで、おとなの演説みたいなのに、りっぱで、いうことも、いちいち、もつとも思える。しかし、裁判長によべると、とにかく、自分の考えておいたことをのべた。

「アヤコさんのお話だと、わるいのは、コロク君ばかりのようですが、ぼくは、そう思いません。ナナコさんが——そのう、つまり原告が、妹らしく、やさしい氣もちで、被告のいいつけにしたがえば、この事件は起こらなかつたと思うのです。だから、手をつけて三べんあやまるにはおよばないと思います。けれども、ぶつたのは、なんといいってもよくないのですから、いちどあやまって、來週の日曜には、ふたりで、ぼくのうちへ遊びにくることに、判決してくださるようお願いいたします。」

裁判長のヤスケは、しばらく、考えていた。それから、口をひらいた。

「この事件は、わがままと、わがままのぶつかりあいだと思います。こういうのが、はきちがえた自由主義、民主主義というのではないのでしょうか。とりわけ、被告が、よく話せばわかつてもらえることを、どなりこんだために、あいての感情を害してしまつたことと、議論で負けて、原告をなぐつたこととは非民主主義的です。しかし、原告にも、あいての氣もちを察してやるという思ひやりがかけていたこともたしかです。そこで、当裁判所は、被告は原告に謝罪すること、そして、來週の日曜日は、一日、原告にサーヴィスすることを命じます。」

おとうさんが、劇がすんだときののように、いきなり、拍手（はくしゅ）した。おかあさんも、それにならつて、つつましく、手をならした。

「いや、なかなか、りっぱな裁判だった。さアみんなで、ざしきへいって、いっしょに、お茶でももう。」

おとうさんをさきに立てて、一同はヤスケのへヤをでたのであつた。

ネコの巢

1

静かな午後である。

白い石をたたんだ、背のひくい門柱のまえに、大きなジンチョウゲがひとかぶうわっている。葉の色のつややかなみどりのあいだに、たくさんのはつばみが点々として、赤くは見えるけれども、春まだ寒い日ざしに、思いきってひらきかねたという風情（ふぜい）である。

そのジンチョウゲのかたわらに、ひとりの少年が立って、往來の一方に、しきりに目をこらしている。野球のバットをつえにして、そのあたまにかさねた左の手にはグ

ロープをはめている。目の色がよわく、はだが白くてなめらかだ。

やがて、そのよわい目の色がいきいきとしてきた。その子が、さっきから、ながめていた方角から、別の少年の姿があらわれてきたのである。姿が、だんだん近づくのを見ると、それはヤマネ・ヒロシだった。きょうは、ヒロシも、グローブをぶらさげて、運動帽をかぶっている。

ふたりの少年の距離がちぢまるにつれて、ふたつの顔は、にこにこしはじめる。

「もう。おそいかい。」

ヒロシがさく。

「ううん、まだ早いよ。」

「だって、バットとグローブなんか持ってこんなところで待ってるんだもの。」

「きみが早くくればいいと思ってさ。ネコの子を見せたいんだよ。」

「ネコの子。アメ、子をうんだの。」

アメというのは、ヤスオのうちのネコの名まえである。雨のふる日にもらってきた

から、というので、ヤスオの父が、こんな変な名をつけてしまったのだった。

「うん、三びき。とつても、かわいいんだ。みんな、ならんで、まえ足でおかあさんのおなかを、ぎゅうぎゅう押しながら乳をのむんだ。」

「どこにいるの。」

「茶の間の戸だな。」

話しながら、ヤスオとヒロシは家のなかへはいっていった。

2

戸だなのフスマは、母ネコが出はいりできるくらいあけてあった。ふたりの少年はそのフスマの前へ、そつとすわりこんだ。

「アメがおこるから、手をだしちゃだめだぜ。」

ヤスオはことわつておいてから、そろそろとフスマをあけた。

なかには古いコウリが一つおいてある。

四つの目が、コウリのなかをのぞきこんだ。

いない。なんにもいない。

ヒロシは、だまつてヤスオの顔を見た。

ヤスオは目を光らして立ちあがった。

「おかあさん。ネコの子がいないよ。」

大きな声でどなりながら、台どころのほうへ駆けだした。

「いない。そんなこと、ないでしょう。」

おかあさんは、手をふきながらでてきて、コウリのうしろや、ふろしき包みのあいだをさがしてくれた。けれども、ネコの子は一びきも見つからなかった。

「どうしたんだろうね、おかあさん。」

ヤスオは心配でたまらないという声をだした。

ヒロシも考えてみた。けれども、まるで見当がつかない。

「さア、アメもないし。ことによると、アメがどこかへ、くわえていったのかもし

れなすね。」

「どうして、くわえてなんかいくの。」

「ネコはね。あんまり、人がのぞいたりすると、こどもを取られやしないかと思ってよそへかくすことがあるんだよ。きつと、アメモ、どこかへ、こどもをかくしたんでしようよ。」

「さがさなくつても、だいじょうぶ。」

「そりや、だいじょうぶ。大きくすることは、親ネコがちゃんと大きくします。でも、子ネコがのらネコになるとこまるね。」

「ぼく、さがすよ。」

ヤスオがはりきった声でいった。

その声をききながして、おかあさんは、やりかけたせんたくをしにいつてしまつた。

ヒロシが、はじめて口をだした。

「でも、試合の時間、まだ、だいじょうぶかしら。」

ふたりの目は、同時に柱の時計を見た。

一時二十五分。試合は午後二時からである。

ヤスオが、学校で、何かの話しのついでに、自分には兄弟はひとりもないが、いとこが山ほどあると、じまんした。そのとき、いとこたちだけで野球のチームができるかときかれたから、できるともと返事をした。それが、きょうの試合のきっかけになった。ヤスオのクラスでつくるチームと、ヤスオのいとこたちでつくるチームで試合をしようという相談ができあがったのだ。中学生をいれてはいけないということになったので、いざとなると、いとこチームも人があまるというわけにはいかなかった。ヤスオのクラスは五年だから、こっちも三年生まで入れたのでは力がよくなる。なるべくなら四年、五年、六年の生徒だけでメンバーをそろえたい。そこで、先週の日曜日に、ヒロシとヤスオは、コロクのうちへいつて相談をした。そしてヒロシの弟の

フカシまで動員しないでも、どうにか、九人のメンバーができることになったのであった。

きょう、試合をすることになっている国民学校のグラウンドは、ヤスオのうちよりも、省線電車の駅に近いので、ほかのいとこたちは、じかに、そこへいくことになっていた。この土地に住んでいるヤスオとヒロシは、さきにそこへいって、みんなを待っている約束だった。ただ、ヒロシのうちは、ヤスオのうちより、もっと奥で、そのため、かよう国民学校もちがっていた。だから、早めに出て、ヤスオをさそいによったわけである。

「だいじょうぶだよ。学校まで八分だよ。」

「でも、コロク君たちが、さきにくるようになるかとわるいぜ。」

「じゃ、ヒロシ君、きみはさきにいってもらおうか。」

「だって、きみの学校だよ、きみがいなきゃ、みんなこまるよ。」

ヤスオはめんどうくさいという顔をした。

「さがしちゃうよ、いそいで。」

「よし、じゃ、ぼくも手つたおう。だけど、十五分さがして見つからなければ、でかけるんだぜ。」

ふたりは、むちゅうになって、さがしはじめた。

戸だなは一つのこらずあけてみた。ナンドのすみの綿のつんである奥ものぞいてみた。

いない。どこにもいない。

クツをはいて、そとへ出た。まず、物ちきの戸をあけて、古箱やこもを、たんねんにどけてさがした。やっぱりいない。

ふたりは顔を見あわせた。

ヒロシがいった。

「いこう。おそくなった。みんなにわるいよ。」

だが、その時、ヤスオは、子ネコの鳴き声が、かすかにきこえたような気がした。「いる、いる。鳴き声がきこえる。」

「鳴き声。」

ヒロシも、思わず聞き耳を立てた。

なるほどきこえるミー、ミーというよわい声が、どこか上のほうからきこえてくる。声にひかれて、ふたりは足を動かした。ちょうど、あたまの上から声がきこえてくる。そう思って、ふたりが立ちどまったのは、げんかんの屋根の下だった。

「げんかんの屋根だ。」

ヒロシは、すぐに、はしごをかけてのぼっていった。一っときも早く子ネコを見つけて、ヤスオを試合に引っぱっていこうと思ったからだ。

「うたかす。」

ヤスオが下から声をかける。

だが、ヒロシの目に見えるものは、あかるい日ざしに照らされたカワラの波ばかりである。子ネコの声は、びったりやんでしまった。

「いない。第一、屋根の上にはネコの巢になりそうなとこなんてないよ。」

「へんだな、たしかに鳴いていたんだけど。」ヤスオが、そういいおわらないうちに、また、子ネコの鳴き声がきこえてきた。

「屋根うらだ。ヤスオ君、きつと、そうだよ。」

「あア、そうか。」

いいながら、ヤスオは、いそいで、うちのなかへはいろうとした。だが、ヒロシがその腕をつかんだ。

「もう、さがしている時間はないよ。さアいこう。」

「だって。ネコの子をつれてこなきヤア。」

「試合がすんでからさがそう。もう、いるところがわかったんだから、心配ないよ。」

「だって、ネズミにくわれたらたいへんだよ。」

「バカだな。いくらこどもだって、ネコがネズミにくわれるものか。」

「アメが、また、どこか、わからないところへつれていくかもしれないぜ。」

ヒロシの顔が急にむづかしくなった。かれは、いつまでたっても、わんぱく小僧の
ようなことをいつている、ヤスオのわがままが、がまんできなくなったのである。

「ヤスオ君。」

あらためて、あいての名をよんだ声は、きびしかった。

「きみ、おちぜいの人と約束しておいて、その約束をまもらなくってもいいと思うの
かい。」

射ぬくような目で、ヒロシは、ヤスオの顔を見すえた。

ヤスオはびっくりして、しだいに目をふせた。まつげのさきには、もう、涙がにじん
でいる。

涙を見ると、ヒロシの心もよわくなりかけた。だが、かれは、つとめて、自分をは
げました。

「きみが、ネコの子をさがすために試合にいかなければ、九人のともだちと、八人の
いとこたちが、むだに集ったことになるんだぜ。さア、いこう。ネコの子は、ぼくが
帰りにいっしょにさがしてやるよ。」

ヤスオは、うなづきながら、うわぎのそでで、横なぐりに、目をこすった。

ふたりが、ヤスオの学校へついた時は、コロクが、待ちきれなくなって、ヤスオの
うちへ、ようすを見に、でかけようとしているところだった。

4

いとこ・チームとクラス・チームとは3対3で六回戦をおわった。第七回、ラスト・
インニングである。

いとこ・チームの先攻だ。ヒロシが安打で一壘へでた。つぎの打者はヤスオだ。主
將のコロクが、ヤスオをわきへ引っぱっていった。

「ヤスオ君、バントでヒロシ君を二壘へ送ってくれ。どうしても、ここで一点とらな
きゃ勝てないんだから。」

だが、ヤスオは不平そうな顔をした。

「ぼく、打ちたいんだ。打てるよ、あんな球。」

「試合は、きみひとりですいているんじゃないぜ。九人ですいているんだ。きみが打ちたくても自分の思うとおりにはいかないよ。ダブル・プレイをくつたらおしまいじゃな
るか。」

いくら、ひとりむすこでわがままなヤスオでも、野球の試合では主將の命令にそむくことができないくらいのことには知っていた。で、これが最後だから、二壘打か三壘打をと思っていたのも、あきらめた。そして、一壘がわに、ゆるいゴロをバントしてヒロシを二壘へ送りこんだ。

あとの一番打者が、第一球をねらい打ちしたのが三壘打になりヒロシはホーム・イン、つづいて安打が一本でて、また一点獲得。さいわい、敵を三点のままていとめる

ことができたので、いとこチームはけっきょく二点の差で勝利をおさめたのだった。

「勝ったのは、ヤスオ君のバントのおかげだよ。」

そういわれると、さっき、バントをしるとコロクにいつけられたときの不平などわすれて、ヤスオもいい氣もちだった。

「フレ、フレ、クラス！」

「フレ、フレ、いとこ！」

たがいにエールを交換して、少年たちは運動場から散っていった。

電車に乗って帰るヒロシのいとこたちは晩ごはんにおくれないように、みんなその場から、駅のほうへ別れていった。

しかし、ヤスオとヒロシには、まだ、ネコの子を、屋根うらから引っぱりだすとい
うしごとが残っていた。

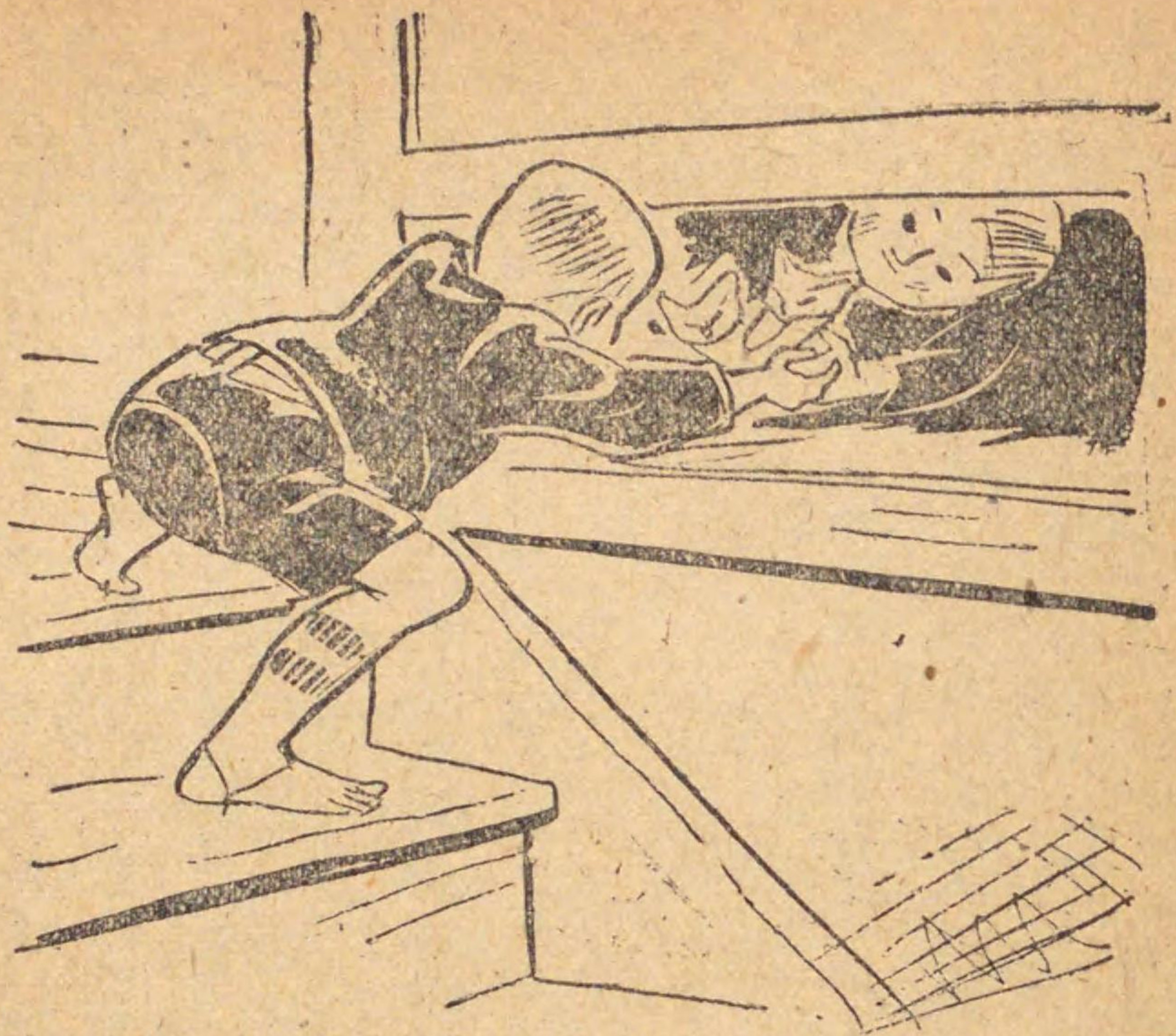
いったい、どこから、げんかんの屋根うらなどへ、はいりこんだのだろう。最初はそれがわからなかった。軒（のき）さきを見てまわっても、ネコがはいりできそう
な、すき間はない。しかし、やっぱり、屋根ガワラの下から子ネコの鳴き声はきこえ
てくる。

ネコは屋根うらに巣をつくったにちがいない。

だんだん調べると、げんかんわきのゲタをいれる戸だなのテンジョウのすみが、少
しやぶれていることがわかった。ネコは、そこから、こどもをくわえこんだのだ。と
ころがこまったことに、その穴は小さくて、とても人間がもぐりこむというわけには
いかない。

おかあさんに相談すると、二階へあがる階段わきのカベのいちばん上に板戸があっ
て、それがはずれる仕かけになっているのを教えてくれた。そこからはいると、げん
かんの屋根うらへもぐりこめるのだ。ヤスオが、もぐりこむことになった。

首をつっこむと、組みあわせた太いハリ柱にほこりがつもって、電線が、たて横、



ななめに走っている。むっとむせっぱいに
おいがする。

「見えるかい。」

ヒロシが、階段の途中からきいた。

「暗くって、よくわからないよ。」

しかし、そういううちにも、ヤスオのか
らだは、穴のなかへ、すっかりのまれてし
まった。

「だいじょうぶかい。」

ヒロシは心配になって、声をかけた。

しんとして、返事はない。だが、まもな
く、ヤスオは、すすだらけの顔を穴からつ
きだした。

「ヒロシ君、とつて。」

両手に一びきずつ子ネコをつかんで、さしだした。三毛とトラぶちと、どっちも、足で空気をかきまわしながら、ピー、ピー鳴いている。

「よしかったです。」

ヒロシはそれを受けとつた。

すぐに、ヤスオは、まっくらな最後の一びきを、親ネコといっしよに、だいておりにきた。

「かわいいね。」

「うん、このカラス・ネコがいちばんつよいんだぜ。」

そんなことをいいながら、ふたりの少年は、あきずに、乳をすう子ネコのようにすをながめていた。

自轉車のゆめ

1

できあがったばかりの自轉車が、幅の広いズツクの帯の上に乗って、光りながら、あとからあとから流れてくる。それを取りあげて、洋服の箱よりもっと大きいボール箱へガタリといれて、きちんとふたをする。ふたをした箱をさしだすと、ほかの人が受け取るところで、その箱は画面のそとへ消えてしまう。——これは、こどもたちへのクリスマス・プレゼントをつくるのに忙しい各工場のようにすを写した、アメリカのニュース映画の一部である。

自轉車の画面が消えたとき、ススムは、思わず息をふかくすいこんだ。アメリカの

少年たちがうらやましかつたのである。かれには、アメリカにいる少年たちは、ひとりのこらず、あの箱にはいった自轉車がもらえるのだという気がした。

ススムの学校では、疎開さきの寺に自轉車が二台そなえてあった。疎開していたのは、三年生と四年生であったが、四年の生徒は、みんな、自轉車に乗るけいこをした。二キロほどはなれた町へ、ときどき、使いにいかなければならなかったからだ。わけでも、ススムは自轉車に乗ることがすきだった。それだけに、また、じょうずでもあった。両手をはなして、寺の庭を、ぐるぐる乗りまわして、友だちに、やんやとほめはやされたこともあった。

東京へ帰ってからは、学校の自轉車は生徒に貸さないことになった。ススムは、一年あまり、自轉車に乗る機会をもたなかった。しかし、自轉車に乗りたい、できることなら自分の自轉車がほしいという気もちは、いつも、心のどこかにかくれていた。そのススムが、新しい自轉車が、ピカピカ光って、あとからあとから流れてくる映画を見たのだから、思わずため息をしたのもむりはなかった。

映画を見たのは、まだ一月の末ごろのことだったが、その後しばらく、ススムは、自轉車があとからあとから流れてくるゆめを、ときどき見た。ゆめで見る自轉車は、きまつて、新しくて、キラキラ光って、きれいだった。だが、朝になって、学校へいく途中で見る、町を走っているほんものの自轉車は、どれもこれも、古くて、うすよごれていた。しかし、ススムは、その古くて、うすよごれた自轉車でもいいから、一つほしいものだと思うのであった。

2

「世界は一つさ。いいかススム。これからは、日本だの日本人だのといふ小さな考えにとらえられていちゃあ、だめだぞ。」

おとうさんは愉快そうにいいながら、サカズキを口へ持っていった。目のふちが、すこし赤くなって、いかにも、いい氣もちそうである。

ススムの父のヤマネ・キヨシは作家だった。だが、あまり有名ではなかった。知っ

ている人は知っているという程度（ていど）にすぎなかった。したがって、いつも貧乏にいじめられどおしだった。けれども、かれにとっては、自分が有名であろうとかなるうと、貧乏であろうとかなるうと、この今の現在が、一年じゅうで、いちばん、心のはればれとした時だった。一週間ばかり苦しんだ小説を、さっき、やっと書きあげた。そして、心にかかる雲もなく、配給の酒のみはじめたところだ。

「なあ、ススム。これからは、世界が一つの國家になる時代だ。世界國家というやつだ。目を大きくあけて、常に世界を見ることをわすれてはだめだぞ。」

おかあさんは、さっき、三つになるススムの妹を寝かしつけに、となりのヘヤへいってしまった。そばに居るのはススムだけだ。だから、お酒をのむと、むやみに、きげんがよくなって、しゃべらずにいられないおとうさんは、しきりに、ススムに話しかけるのだ。

ススムは、さっきから読んでいた「だれにもできる、模型電気機関車の作り方」という雑誌の記事から、あたまであげた。一つは、「次の材料を模型店で求めなさい。」とあって、まっさきに、「モーター一台」と書いてあるのを見て失望したからである。この模型機関車は、けっして、「だれにもできる」ものではなくて、金のある人にしかできないものであることがわかったからである。

「世界國家っていうと、日本だのアメリカだのって國は、みんな、なくなっちゃまうの。」

「ハハ、そう、かんたんなわけにはいかないさ。日本も、アメリカもあるにはある。だが、日本もアメリカも世界をおさめる政府の命令にしたがって、國としてのいとなみをつづけてゆくことになるのさ。ちょうど北海道廳もあり、京都府廳もあり、福岡縣廳もあって、それぞれの地方の政治をやっているが、そのどれもが、日本の中央政府の命令に服していくようなものさ。」

「だれが、世界政府の大統領になるの。」
「デモクラシーさ。民主主義だよ。國際民主主義というやつさ。世界各国から代表者をだして、それで世界政府をつくるんだ。」

「どうして、そんなことをしなければいけないのさ。」

「第一、世界がせまくなっちゃった。もう、世界が一つになっちゃってるんだよ。飛行機でニューヨークをたつた人は、二三日たてば、中華民國のナンキンへ着いてるといふ始末じゃないか。きょう東京で起こった事件は、もうあしたのロンドンの新聞にのっているんだぜ。世界は一つさ。完全に一つだよ。それから、さしあたって大事なことは戦争防止、戦争ができないようにすることだ。こんど世界戦争が起こって見ると、地球の上から人類は影を消しちゃうかも知れないぞ。なにしろ、たった一発の原子爆弾で広島がなくなっちゃったんだからな。こいつを、なん千発もなん万発も地球の上にはらまいて見る。地球全体が焼け野原になっちゃうにきまつている。だから、どんなことをしても、戦争はゼツタイにできない仕組みにしておかなければならないのさ。だから、世界國家をつくって、その政府が、戦争をしたがる國をおさえつけるようにしなきゃならないんだ。」

「そんなこと、できるかなあ。」

「できるとも。人間は底ぬけのバカじゃあない。人類は進歩する。ときどきは、バカげたまねもするが、長い長い目で見れば、人間は、ほんのすこしずつではあるけれど進んできている。おとうさんは、それを信じているんだ。きみにススムという名をつけたのも、じつは、その意味なんだ。これからの日本は世界國家をしっかりとしたものにするために、大いに働かなければならない。そのつもりで、ススムも、大いに勉強してもらいたいもんだな。」

「世界國家って、もういくらか、できかけているの。」

「そうだ。かんじんな話をわすれていた。きみは、まだ新聞を読まないから知るまいが、日本やドイツ、イタリーをあい手に戦った連合國で、國際連合というものをつくっている。いわば、この國際連合の委員会が世界國家の政府の卵みたいなものだ。國際連合の安全保障理事会というのが、今では、戦争を起こしそうな國をおさえつけるしごとを引き受けているんだよ。だから、名まえはちがうけれど、世界國家は、もう、はじまりかけているといっても、いいようなものさ。」

ススムは、あくびをした。

おかあさんが、となりのヘヤからでてきた。

「あなた、まだめしあがっているんですか。」

「うん、ちょうど、なくなったところだ。もう一本たのむ。」

「またになすつたら。」

「まあ、そういうな。ススムに演説をしながら、のんだので身につかなかった。」

「どうですか。まっかな顔をしていらっしやるわよ。」

そういうながらも、おかあさんは、カンドックリに、あたらしく、お酒をいれてきた。

例によって、おとうさんのきげんは、ますます、よくなるばかりである。

「そうそう。きみは、今月から六年生になったんだな。来年は、いよいよ中学生か。」

ところで、まだ、なんにも進級祝いを買ってやらなかったな。買ってやろう。なんでも買ってやるぞ。ほしいものをいってみろ。」

おかあさんが笑いだした。

「また、はじまりましたね。だめよ、ススムさん、お酒をのんでいる時のおとうさんと約束しても——。」

「バカをいえ、これんばかりの酒で、ようものか。買ってやるといったら、きつと、買ってやる。」

おとうさんが、いきごんでいうのを聞きながして、おかあさんは、また、いそいで、となりのヘヤへ立った。寝ているススムの妹が、なにに、うなされたのか、急に泣きだしたからである。

「ほんと、おとうさん、なんでも買ってくれる？」

「買ってやるとも。」

じゃ、自転車を買ってください。——ということばがノドまで、つきあげてきた。

だが、言葉はそこで、つかえてしまった。ススムは、自転車が今なん千円もすることも、自分のうちにはそれほどお金がないこともよく知っていた。だから、こどもながら、遠慮（えんりょ）したのである。

「ははあ、ほしいものが、あんまり、たくさんあるんで、こまってるな。冒険小説の本か、それとも、新しいクツかな。」

こうまでいわれては、もう、ススムも、がまんできなくなった。

「ほんとは、ぼく、自転車がほしいんだけど——。」

いいおわると、ススムはおとうさんが、どんな顔をするだろうと思って、心配そうな目をした。

ところが、おとうさんは、いよいよ、じょうきげんである。

「なんだ。何かと思つたら、そんなものか。よし、自転車でも、汽車でも、電車でも、なんでも買ってやる。一年に一度の進級祝いだからな。人類の進歩、ススムの進歩だ。——おい、サトコ、おれは、あした、ススムといっしょに、自転車を買いにで

かけるぞ。」

おとうさんは、大きな声で、となりのヘヤのおかあさんに話しかけた。

おかあさんは、お酒によつているときのおとうさんのいうことなど問題にしない。

「何を、おっしゃってるんですね。いいかげんにして、ごはんをめしあがつてくださらなければ、台どころがかたづかなくつて、こまるじゃありませんか。」

ススムも、きょうのおとうさんの約束は、あてにならないと鑑定（かんてい）した。だから、あとは、おかあさんにまかせて、さっさと、自分の寝どこへもぐりこんだ。

その晩も、自転車のゆめを見た。人の乗っていない自転車が、生きもののように、ひとりりで走りまわる。なん台もつながって、くるくる、自分をかこんで、輪をかいて走る。その輪が、だんだん、せまくなると、自分のからだか、急に、ふわりと宙に浮いた——。

あくる日は、氣もちよく晴れたいい日曜だった。めずらしく風がなくて、空氣が
たたくよどんでいる。

「おい、ススム、でかけよう。」

もちろん、ススムは、きのうのことは、よくおぼえている。しかし、キツネにばか
されたような氣もちである。いったい、おとうさんは、ほんとに自轉車を買ってくれ
るつもりなのだろうか。いつのまに、うちは、そんなに金持ちになったのだろう。だ
が、おとうさんは、いっこうあたりまえな顔をして、げんかんのタタキに立って、ス
スムを待っている。

ススムは、半信半疑の氣もちでトリウチ帽子にインゲンアネスのおとうさんと、門を
でた。こうして、おとうさんとふたりで、そとへでるのは、ずいぶん、久しぶりだ。
なんとなく、うれしくなってくる。

よそのうちの庭から、道をのぞいているサクラの枝には、六七分ほころびた花がう
つくしい。人にふまれない、道のはずれは、ところどころ、草の芽でみどりいろにな
って、そのなかに、コゴメのような花が、フジいろに、つつましくさいている。

お酒をのんでいないときのおとうさんは、あまり、口をきかない。ふたりは、た
だ、のんびりと歩いていく。

省線電車の駅も、電車のなかも、最後にたどりついたデパートも、たいへんな人ご
みだった。ごたごた人の集るところへでるのが、ススムのおとうさんは大きらいだ。で、
おとうさんのきげんは、だんだん、わるくなる。

どういうつもりか、デパートへはいると、おとうさんは、つかつかと、おもちゃの
賣り場へ歩いていった。しかたがないからススムもついていく。

おとうさんは、きよろきよろ、おもちゃの陳列を見わたしている。いつときも早
く、買いのをすまして、うちへ帰りたいというようすである。

——こんなとこ、さがしたって自轉車なんかあるものか。

そう思つて、ススムは、内心、大いに不平なのだ。けれども、おとうさんのきげんがわるいことがわかつているから、がまんしている。

そのうちに、おとうさんは、店員をひとりつかまえた。

「きみ、自轉車はないかね。おもちゃの自轉車は——。」

「さあ自轉車のおもちゃというのはございません。自動車か電車ではいけませんでしょうか。」

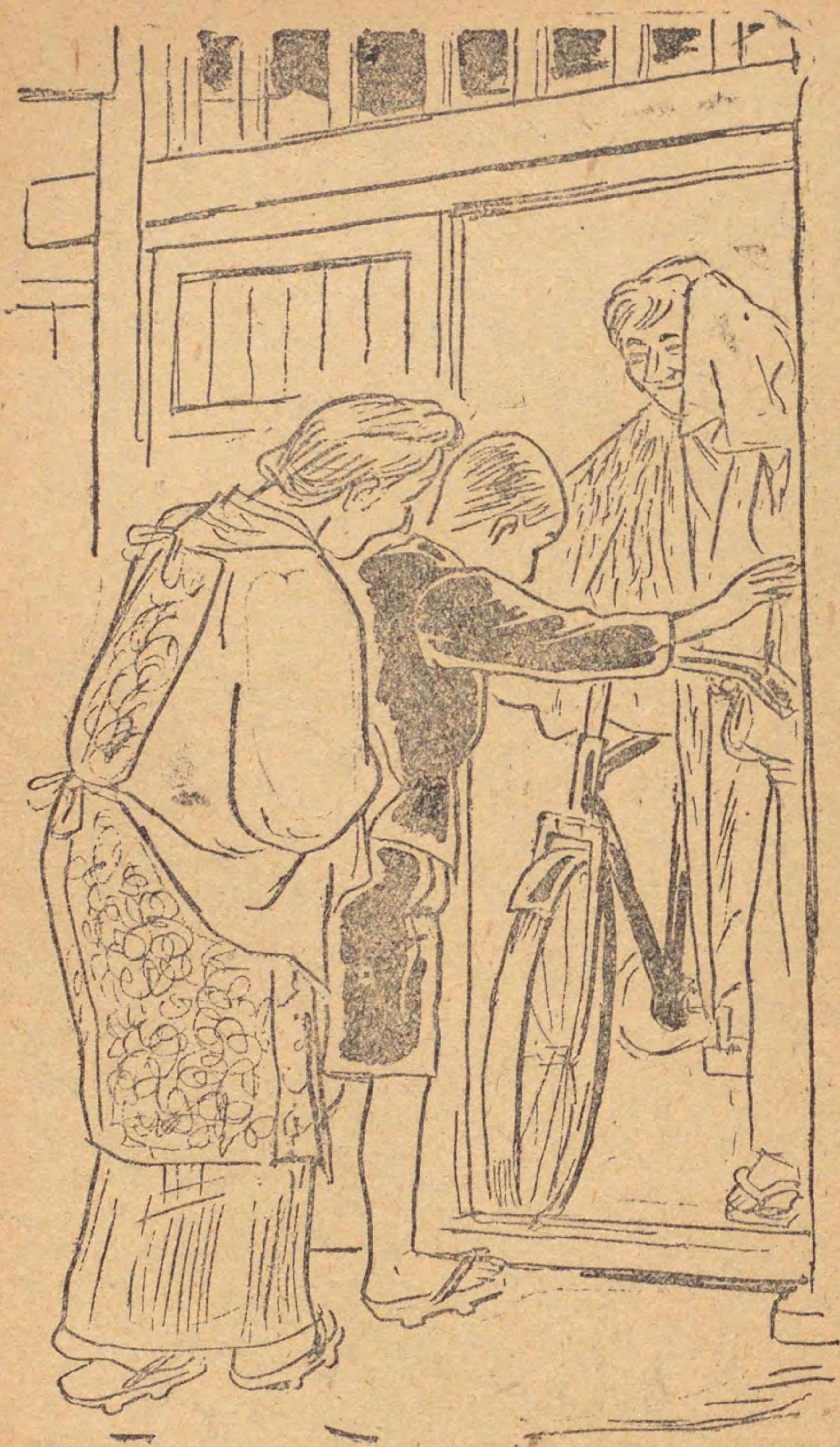
ススムは、顔から火が出るような気がした。自轉車のおもちゃなんてあるものか。

おとうさんときたら、世界國家だの國際連合だのといふことは、よく、知っているくせに、おもちゃのことときたら、ちっとも知っちゃあいないんだな——。ススムは、おとうさんのインヴァネスのそでをひっぱった。

「おとうさん、あっちへ、いこうよ。」

だが、その時、「ススム君！」といいながら、そばへ駆けよってきたものがあつた。

「あつ、ヒロシ君。」



ススムのおとうさんも、声のするほうを、ふりかえった。

「ヒロシ、だれときたんだ。」

だが、ヒロシが返事をするひまもなく、ヒロシのおとうさんが、フカシといっしょに、歩みよってきた。

「キヨシ、きみとデパートで会うなんて、めずらしいこったな。」

「にいさん、ごぶさたをしています。きのうススムに、おもちゃの自轉車を買ってやる約束をしちまったもんですからね。」

「おもちゃの自轉車？」

「ちがうよ、おじさん。ぼくは、ほんとの自轉車を買ってもらうつもりだったんだよ。」

ススムがわきから口をだすと、おとうさんがはじめて目をまるくした。

「こいつめ、そんな大望（たいもう）を起こしていたのか。」

おとうさんと、おじさんは顔を見あわして、声をだしてわらった。そのわらい声と

いっしょに、いくぶんあてにしていたススムの自轉車のゆめは、けむりのように消えていった。

「ハハ、ハハ、このご時勢に自轉車はむりだよ。ススムも、ヒロシとおそろいに、スケートでも買ってもらえば、いいじゃないか。」

「スケート？」

ススムのおとうさんが、そういいながら、ヒロシのほうを見ると、ヒロシは、さげていた大きな木製のおもちゃを、心もち、上へあげて見せた。

「それか。それはスケートじゃない。スクーターという遊び道具だ。まあ、じゅうぶんに進歩するまえの自轉車みたいなものだ。ススムも、一つ、スクーターで、がまんしておくんだな。」

ススムは、けつきよく、おとうさんのいう、スケートでないスクーターを買ってもらって、デパートを出た。

ススムは、学校から帰って、二三度スクーターをこころみたが、いっこう、おもしろ

ろくない。飛行機がほしいといったのに、荷車をもらって、あてがはずれたようなもので、どうも気が乗らない。ススムのスクーターは、げんかんのすみで、ほこりをあびていた。

一週間ばかりたった、ある日の夕がた、ススムのおとうさんが、とてつもなく大きな声をだして、門のとびらをあげた。

「ススム、ほんものの自轉車がやってきましたぞ……」

「なんですね。門のそとから、そんな大きな声をだして。」

おかあさんが、台どころ口から、きびしく、たしなめた。

おかあさんも、ススムも、おとうさんが、急に、どうかしたのではないかと思つた。だが、何はともあれ、ふたりとも、門のところまで飛びだしていった。

おとうさんは、なれぬ手つきで、かた手で一台の自轉車をあさえて、かた手で、ひたいの汗をぬぐっているところだった。

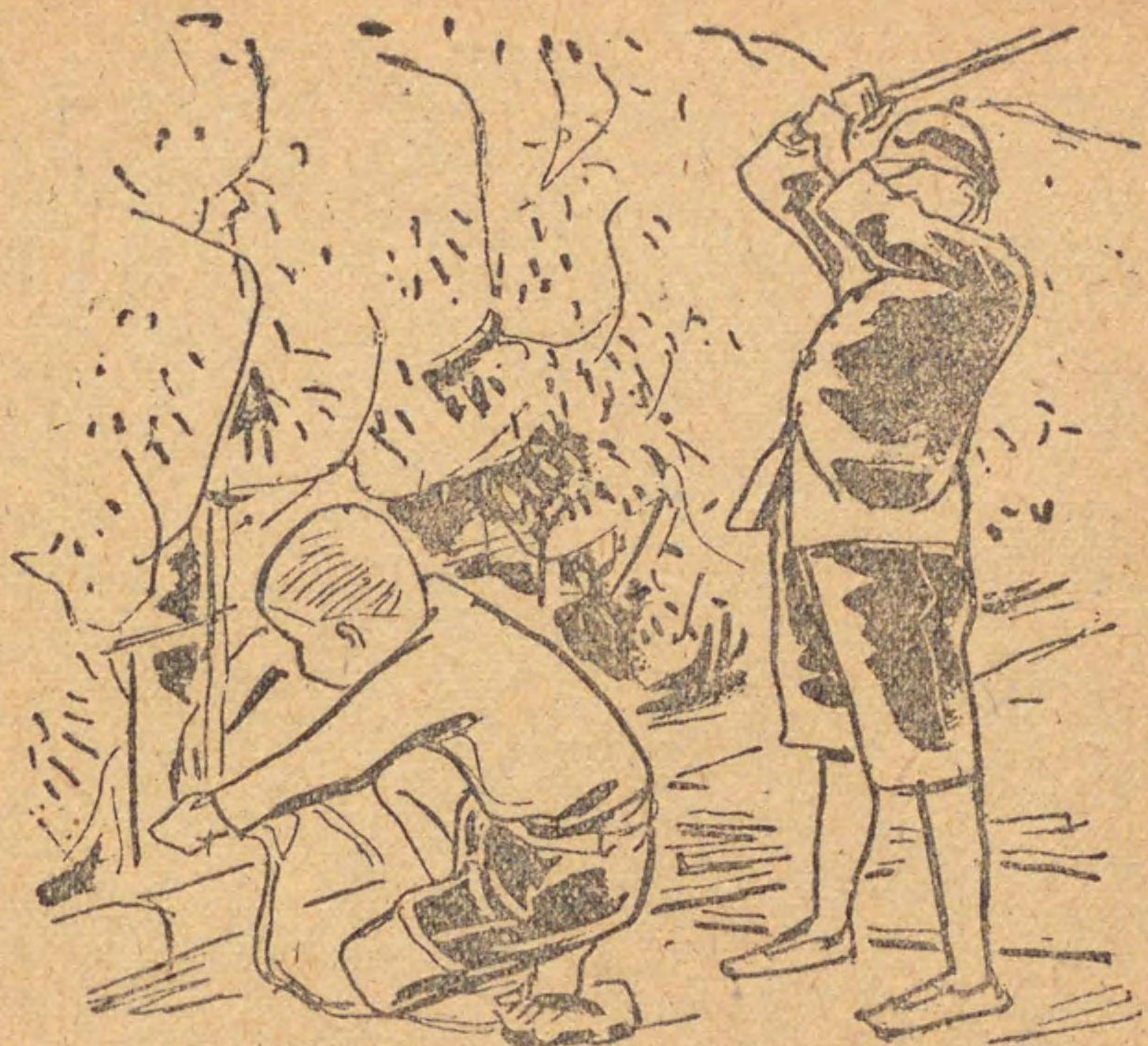
「カワセさんが、急に轉任するんで、どこかへ自轉車をあずけていきたいというのさ。あずかっているあいだ利用してもいいのかってきいたら、そっとしまっておくと、タイヤが、かたくなって、ひびがあるから、乗ってくれる人でなくちゃこまるというのだ。よしてきたというんで、あすとはいわず、その場ですぐにあずかってきたんだ。どうだ、ススム、うれしいだろう。」

ススムは返事ができなかつた。

おかあさんもだまって立っている。

金星がススムの家の屋根のむねをすこしはなれたところで、いつものとおり、美しい光をはなちはじめた。

約 東



ヤスオが、ヒロシの家の横へでると、一面に赤く芽をふいたカナメ・ガキがきれいだった。ヒロシが、そのカキネの根がたにしゃがんで、熱心に何かしている。ヤスオがきたことなどには、いっこう気がつかないようすだ。ヒロシのわれをわすれたその姿が、ヤスオの心に、ひよいと、いたずら

1

な氣もちを起こさせた。

ヤスオは、なんということなしに、そのへんにちらばっていた青ダケの一本をひろいあげて、そつと、ヒロシのうしろへ、しのびよった。よく見ると、ヒロシは、新しいタケをたてて、カキネのつくりのいをしていなのだ。自由になりにくいシユロ・ナワを結ぶことに氣をとられて、ヒロシは、まだ、ヤスオが近づいたことを、ちつとも、知らずにいる。

ヤスオは、ひとりで、おもしろくなつた。タケの棒を、かたなのように、かまえて、ヒロシをめがけてさつと切りおろすまねをした。

だが、その時、ちょうど、ナワを結びおわつたヒロシは、勢いよく、立ちあがった。

結果は、ヤスオが、はげしい力で、ヒロシのあたまを、なぐりつけたことになってしまった。

しびれるほど痛かった。あまりの不意うちだったので、おどろきもひどかった。

「だれだ！」

いいながら、ふりむいたヒロシの顔は、青く、ひきつっていた。

ヤスオはびっくりした。いそいで、持っているタケの棒をなげすてた。

「ごめんよ。ぶつつもりじゃなかったんだ。」

いおうとする声は、ノドにひっかかってしまった。それほど、ヒロシの顔はあそろしかったのだ。

「やったな！」

と、ヒロシがさげふのと、そのみぎ手がヤスオのホッペタへ飛んでくると同時だった。

「ちがう。ちがうんだよ。」

いいながら、ヤスオは、うしろへ飛びのいたので、やっと、ヒロシの指さきが、あいての顔にさわっただけだった。

しくじったので、ヒロシは、よけい腹が立ってきた。あいてのいうことばなど、む

ろん、耳へははいらない。いきなり、ヤスオに組みついていった。

こうなっては、ヤスオも、ただ、いいわけをしていることはできない。ソデをつかんだヒロシの手をもぎはなそうとした。

もみあううちに、ふたりはたおれた。地面の上をころげまわった。ヒロシがウマ乗りになった。ヤスオの帽子がぬげておち、齒から血がでてきた。

ヒロシの兄のタカシが、とりにいったノコギリを持って、もどってきた。かどをまがって、ひと目みると、この始末だ。

「バカ！ 何をしているんだ。」

どなりながら、かけつけてくる。

ヒロシとヤスオとは、今は泣きながら、けんかをしているのだ。だれがこようと、やめることはできない。

タカシは、ノコギリをほうりだして、左右の手で、弟と、いとこのエリガミをつかんだ。

「やめる！ バカなことは。」

ぐいと、ふたりを引き起こして、そのまま、左右へ引きはなした。

2

「いったい、どうしたっていうんだ。けんかのもとをいってみる。」

タカシに聞かれると、ふたりは、いちどにいいだした。

「ヤスオ君が、いきなり、ぼくのあたまをタケの棒で、いやっというほど——。」

「ぼくが、遊びにきたこと、ちつとも、知らないで、ヒロシ君が——。」

「だまって。ふたりとも。べつべつに話さなければ、なんのことか、さっぱり、わからないじゃないか。ヤスオ君からきこう。ヒロシは、だまっているんだぞ、ヤスオ君がすむまで。」

ヒロシは不平そうだった。だが、兄さんのいいつけだから、しかたなしに、がまんしていた。

ところが、タカシが、ヤスオのほうの話しをさきに聞くことにしたのは、たいへんつごうがよかった。どこに、まちがいのものがあつたかが、タカシにわかったばかりでなく、ヒロシにも、なるほどそうかと、はじめて、なっとくがいったからである。

「つまり、ヤスオ君の持っているタケの棒へ、ヒロシが自分のあたまを持っていて、ぶつけたようなものだな。」

わらいながら、タカシがいった。

だが、そういわれたのではヒロシがおさまれなかった。

「ちがうよ、にいさん。ヤスオ君がタケの棒をふりおろしたから、ぼくのあたまにぶつかったんじゃないか。とても、いたかつたんだぜ。あたまのしんが、ジーンっていうくらい、いたかつたんだから。」

「よし、よし、わかった。ヒロシがおこつたのもむりがないと思うな。けれども、ヤスオ君が、ヒロシがあんまり夢中になっているのを見て、ちよいと、いたずらがしてみたくなったのだって、やっぱりむりがないじゃないか。つまり、きょうのけんか

は、おたがいのふしあわせだね。ただ、ヒロシが、むやみにおこっちまわらないで、ヤスオ君のいいわけをきいてあげられたら、もっとえらかったんだがなア。」

「だって、にいさん、そうすれば、ぼくは、ただ、なぐられっぱなしになるじゃないか。そんなのいやだ。」

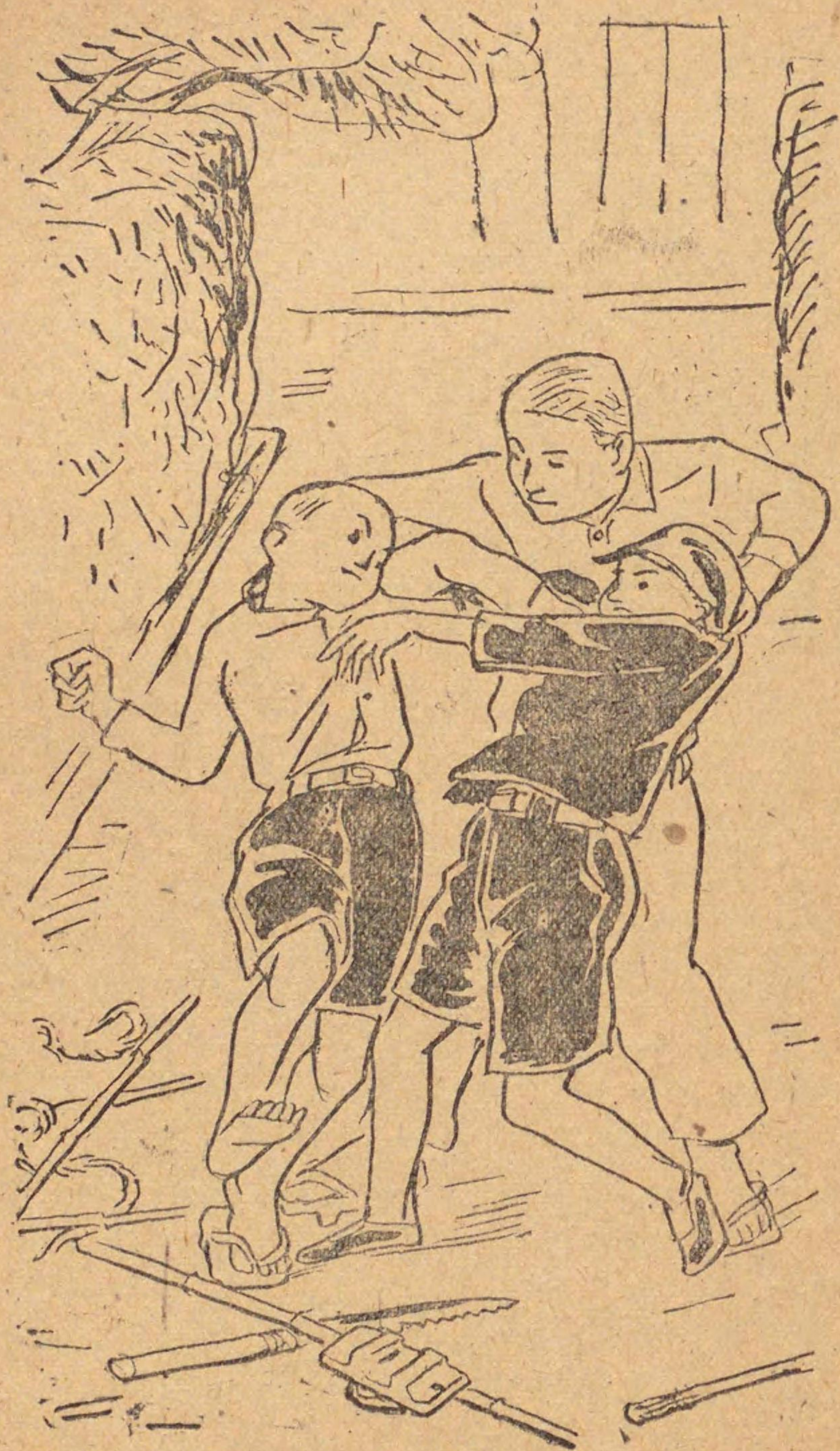
「ハハハ、それもそうか。それでは、もう、氣のすむほど、けんかをしたんだから、ヒロシにも、これで、なかなかおりにすることに、不服はないだろうな。」

ヒロシは、だまって、うなずいてみせた。

「ヤスオ君はどうだ。ヒロシとなかなかおりにしてくれるか。」

ヤスオもうなずいた。

「ようし。それですんだ。ところで、一つ約束してもらいたいことがあるんだがな。つまらないことで、いとこ同志が、つかみあいのけんかをして、齒から血をだしたなんてことは、あんまり、じまんになる話ではない。どうだろう。ふたりとも、きょうのけんかのことは、けっして、だれにも話さないという約束をしてもらえないだろう



か。」

ヒロシとヤスオは、たがいに顔を見あわせてから、そろって、大きく、うなずいてみせた。

「それでは、ヒロシ、カキネはぼくが、ひとりでおすから、あっちへいって、ヤスオ君と遊んでいいよ。だが、服のどろをはらって、湯どので、顔と手をあらうのがさきだね。」

つかみあいのけんかをしたあとというものは、いくら日ごろなかのよいもの同志のあいだでも、あんまり、ぐあいのよいものではない。ヒロシとヤスオも、その日は、いつものように遊びが、はずまなかった。十五分あまりキャッチ・ボールをしただけで、ヤスオは帰っていった。

ヒロシは、ヤスオのうしろ姿を見おくりながら、さっきのけんかのことを、わるいゆめのように思っていた。そして、タカシにいさんに、「けんかのことばだれにも話すな。」といわれたことが少し気になった。なんかおもしろしい心もちだ。じぶんでやったことをしゃべらずにいるのは、だれにしても、なかなか、らくなことではないものである。

3

四五日すぎた。

省線の駅二つほどはなれたところに住んでいるススムが、とくいの自轉車に乗って、ヤスオのうちへやってきた。日にすいて青いかげを落す、げんかんのカエデ若葉の下に、カタンと自轉車を立てる。荷物をのせる台の上には、小さなカゴが一つしぱりつけてある。ネコの子をもらいにきたのである。

「ヤスオ・クン！」

ススムは、ベルを鳴らすかわりに、大きな声でよんだ。

ヤスオがかけてきて、ドアをあけた。

「ネコの子、もらいにきたよ。」

ススムがいきなり、いう。

「あそんでいっても、いいんだろう。」

「うん。」

ススムは、あいまいな返事をする。

そこへ、ヤスオのおかあさんも顔をだした。

「ススムさん、あがって、少しやすんでいきなさい。」

だが、ススムは、じつは自轉車が心配なのである。ヤスオのうちの門にはトビラがついていないのだ。

「ぼく、すぐ帰ります。ネコの子をください。ぼく、あのカラス・ネコがほしいんです。」

「そんなこと、いわずに、まア、あがってらっしゃい。——あア、自轉車はお庭へまわしておけば、だいじょうぶですよ。」

そこで、ススムは、やっと安心して、木戸から、自轉車といっしょに庭へまわった。

日のあたるエンガワで、ヤスオとススムは、おかあさんのだしてくれたナンキンマメをたべながら話しをする。

「コロク君。キャッチ・マスク、買ってもらったんだってね。」

ヤスオが目を光らす。

「ふうん、いいな。だけど、コロク君、もう中学だから、いとこ・チームへきてもらえないから、つまらないね。——ヒロシ君遊びに、くるかい。」

「こないだ、ぼく、ヒロシ君ちへ遊びにいったんだよ。だけど——。」

ススムは、ヤスオの顔を見て、あとを待っていた。けれども、ヤスオのことばは、そこからさきへ進まない。ヤスオは、けんかのことばは、だれにも話すなといわれたタカシのことばを思いだしたのだ。タカシは、中学の三年生だ。しかられたらこわい。

「だけど、どうしたのさ。」

ススムがさいそくする。

「だけど、すぐ帰ってきちゃった。」

「どうして、すぐ帰ってきちゃったのさ。」

ヤスオは返事につまった。

「ヒロシ君、つまないんだもの。」

「どうしてさ。どうしてつまないんだい。」

ヤスオは、いよいよ、こまった。

「ただ、つまないんだよ。」

ススムは、ちよつと考えていた。それから、いきなり、いった。

「けんかしたんだね。」

「うん。」

そう返事をするといっしょに、ヤスオはしまったと思ったけれども、もう、間にあわなかつた。

「どうして、けんかしたのさ。」

「だって、ヒロシ君、なんにも知らずに、カキネをなおしていたから、ぼくが、ちよつとうしろから、いたずらしたら、いきなりぼくに組みついてきたんだもの。ウマ乗りになって、顔をひっかいたり、らんぼうったらありゃしない。」

いったん話しはじめると、もう、だめだった。ヤスオは、うそをつく気はなかつたけれども、つい、ヒロシばかりわるかったような話しかたをした。ヤスオには、タケの棒でなぐられたヒロシのあたまが、どんなに痛かったか、よくわかっていなかったのだ。

「そうかなあ。ヒロシ君、そんな、らんぼうかな。ひどいやつだね。」

だが、ススムがいいおわらないうちに、その当のヒロシが帽子を手に持って座敷のほうから、すうつとはいつてきた。

ヒロシは、いなかからもらったキリボシのお福わけをとどける使いにきたのだつた。台どころからはいつてきたら、「ススムさんもきているから、お庭のエンガワへい

「ってごらんさい。」とおばさんにいわれて、なんの氣もなく、そこまで、歩いてきたのだった。

ところが、ススムが、じぶんのことを、「ヒロシ君、そんな、らんぼうかな。ひどいやつだね。」といっていることばが、そっくり、耳へ飛びこんでしまったのだ。ヒロシは立ちすくんだ。

いきがかりで、ススムはだまっていられなかった。

「ヒロシ君、きみ、らんぼうじゃないか。」

食ってかかるように、立っているヒロシをにらんだ。

「何が、らんぼうなんだ。」

「だって、ヤスオ君がなんにもしないのに、きみは、ウマ乗りになって、ヤスオ君の顔をひっかいたじゃないか。」

だが、ヒロシは、ぎゅっと口を結んで返事をしなかった。しばらく、そのまま、棒立ちになっていたが、やがて、くるりとうしろを向いて、かけるようにして、また、

台どころぐちから帰ってしまった。

そのあいだじゅう、ヤスオは、うつむいたままで、うごかなかった。

4

その晩、タカシが、ヤスオのおとうさんを訪ねてきた。

ヤスオは、おとうさんとタカシとがならんでいる座敷へよばれた。ふたりとも、きちんとすわって、むづかしい顔をしている。

ヤスオも、かたくなって、四角くすわった。

タカシが口をひらいた。

「いま、おとうさんによくお話しをしたのだが、きみは、ヒロシときみとぼくと三人で約束した約束をやぶった。きみとヒロシがけんかをしたことは、ぼくも、むろん、だれにも話さなかった。ヒロシも話さなかった。だが、きみは、ススム君に話してしまった。これは、はずかしいことだ。こないだ、けんかをしたことは、ちっとも、は

ずかしいことではない。それよりも、いつたん約束をしておきながら、それを守ることができなかったのは、いくじのないことだと思ふな。ヒロシは、ヤスオ君がススム君に話した以上、じぶんもだまっているわけにいかないから、こないだの約束をやめにしてくれて、ぼくのところへことわりにきたんだぜ。ヒロシは泣いていたさ。――きみをこのままにすることはできない。おとうさんのお許しがでたんだから、そのつもりで、バツを受けたまえ。」

いいおわると、いっしょに、タカシの大きな手のひらが、ヤスオのホツペタへ飛んできた。

一ツ、二ツ、三ツ。

なぐるタカシの目にも、見ているおとうさんの目にも涙が光っていた。

「もっと、意志のしっかりした、りっぱな人間にならなきゃだめだぞ。」

さいごに、おとうさんがいった、えぐるような声は、ヤスオの耳のそこに、いつまでも残った。

こわれたハモニカ

1

タロウは、「いってまいります。」といいながら、そばにおいといた帽子をつかんで、おゼンから立ちあがった。そそくさと、カバンを肩にかけながら、茶の間をでようとする。とたんに、おみおつけのナベに、けつまずいて、自分もよろよると、ころげそうになった。ナベは、みごとに、ひっくりかえって、残っていたミソしるが、たみの上をながれた。

「氣をおつけなさい。」

おかあさんの声がとんでくる。

おとうさんは、読んでいる新聞から、ちょっと、顔をあげただけだった。

妹のミヨコは、まだ小学校へもあがれない年のくせに、少し、ケイベツした目で、タロウを見ている。

その目つきがタロウのカンにさわった。すなおに、あやまれない氣もちだ。

「こんなところに、おナベ、おいとくんだもの——。」

「おゼンのそばに、おナベがあるのは、あたりまえです。少しは、足もとに氣をつけて歩きなさい。」

おかあさんの言葉がピシリときた。

タロウは、首をちぢめて、げんかんを飛びだした。

家を少しはなれると、足をゆるめて考える。——少しは、足もとに氣をつけて歩きなさい。なるほど、あの時、ぼくは、早く学校へいくことに氣をとられて、足もとにはちっとも氣をつけていなかった。けれども、おとなってものは、どんな時でも、足もとに氣をつけて、うちんなかを歩いているものかなア。

タロウは、この疑問(ぎもん)をそのうちに、ぜひとも解決したいものだと思った。いったい、タロウは、何ごとによらず、疑問はじぶんで解決しないと氣のすまない少年だった。

いつか、おとうさんに、おまえは、年じゅう手をきたなくしているといつて、しかられたことがあった。この時もタロウは、おとなというものは、そんなに、いつでも手をきれいしておくものだろうかといふ疑問を起こした。

そこで、エンピツをゴシゴシけずって、黒い粉を、しこたま、つくった。そして、おとうさんが会社へでかけるまえに、その粉を、そっと、おとうさんの洋服のポケットのなかへ、まきちらしておいた。そのポケットには、いつも、タバコのケースがはいっているのだから、おとうさんは、いやでも、いちにちのうちに、なんべんか、手をつっこまなければならぬ。こうしておいても、夕がた帰ってきたときに、おとうさんの手は、いつものとおり、きれいになっているだろうか。タロウは、それがたしかめたかったのである。

「お帰りなさい。」

と、おかあさんといっしょに、げんかんへでたタロウは、一番におとうさんの手に、注意ぶかく、目をそそいだ。おとうさんの手は、いつものとおり、きれいだった。

タロウは、なるほどと感心した。さすがにおとなは、こごとをいうだけのことはあると思つた。

晩ごはんの時、おとうさんが、おかあさんにきいた。

「おまえ、ナベズミのついた手で、おれのシガレット・ケースをいじりゃあしなかつたかい。」

「なぜですか。」

おかあさんは、ふしぎな顔をした。

「会社のツクエで、タバコを出したら、白いタバコが黒くよごれている。見るとじぶんの指がススでよごれているんだ。変だと思つて調べてみると、ケースもポケットのなかも、ススだらけだったぜ。」

「おかしいわね。」

おかあさんは、いよいよ、ふしぎな顔をするばかりだ。

タロウは、だまつているわけにはいかなかった。そこで、すぐ、いさぎよく名をあげた。

「ぼくです。ぼくがエンピツの粉をいれておいたのです。」

「エンピツの粉？」

おとうさんは、おこらない。タロウの顔を、まじまじ、ながめながら、あとの説明を待っている。

タロウは、どういうわけで、おとうさんのポケットにエンピツの粉をいれておかなければならないことになったかを、くわしく説明した。

「なんという、わるいいたずらをするんでしょうね、この子は。」

おかあさんはマユをよせて、タロウをにらんだ。

「まあいいさ。どうだ、おとうさんの手はよごれていなかったらう。——だがな、タ

ロウ、これからは、そういう、たちのわるい、いたずらは、やめにしろよ。」
その時は、それですんだ。

タロウは、それからは、手がよざれるとせつせと洗うように氣をつけた。

2

学校のひけるころに、ひくい雲から、とうとう、雨がおちはじめた。こどもたちは、バラバラ銀いろに光る雨あしをつきぬけて、四方へ散った。

タロウがうちの門をくぐると、庭木戸のまえのアジサイが、あい色の大きなあたまをうなだれて、しずくをたらしていた。

「ただいま。」

声をかけても、きょうは、おかあさんはでてこない。座敷に客がきているらしい。

女の人のゲタが、きちんと、タタキにそろえてある。

ミヨコは、おともだちのところへ遊びにいった、雨にふりこめられてでもいるのだ

ろう。うちにいるようすはない。

タロウは、茶ダンスのいつものところから、木ザラにのせたお三時をだして、ひとりでたべる。つまらない。せっかく、うちへ帰ってきてても、口をきくあいてのないのは、はりあいのないものだ。

となりのざしきでは、何かおもしろいことがあるらしく、お客さまとおかあさんが、声をそろえて、わらっている。どうも、聞きおぼえのない声だ。

なんとということなしにあたりをながめていたタロウの目が、茶ダンスのタナにのせてある水サシの上でとまった。

ヒバチのなかにしかけてある三百ワットの電気コンロにかかっているヤカンが、シンジュン湯氣を立てている。

タロウは、ちよつと考える。——おとなというものは、いつも足もとに氣をつけて、うちのなかを歩くものかどうかためてみるには、ちょうどいい時だと思う。
三きれあったパンをたいらげて、木ザラがからになると、タロウは立ちあがって、

茶ダンスの水サシに手をかけた。そっとおろして、座敷とのさかいのフスマのまえまで持っていくと、静かにタタミの上へおいた。むろん、水がいっぱいはいっている。座敷から出てくる人は、よっぽど足もとに氣をつけていないかぎり、この水サシにけつまずかないわけにはいくまい。

タロウは、おかあさんが、どのくらいよく足もとに氣をつけて、うちのなかを歩くものか、ためしてみるつもりなのである。

「もう、お湯がわいたでしょうから、ちょっと、お茶を——。」

「どうぞ、かまわないでおいてちょうだい。」
座敷から、そういうやりとりが聞こえて、おかあさんが、立ちあがるらしいようすだ。

タロウは、かたずをのんだ。

フスマがあいた。

タロウは、タタミの上の水サシをじっと見つめた。ひっくりかえったら、すぐ台ど

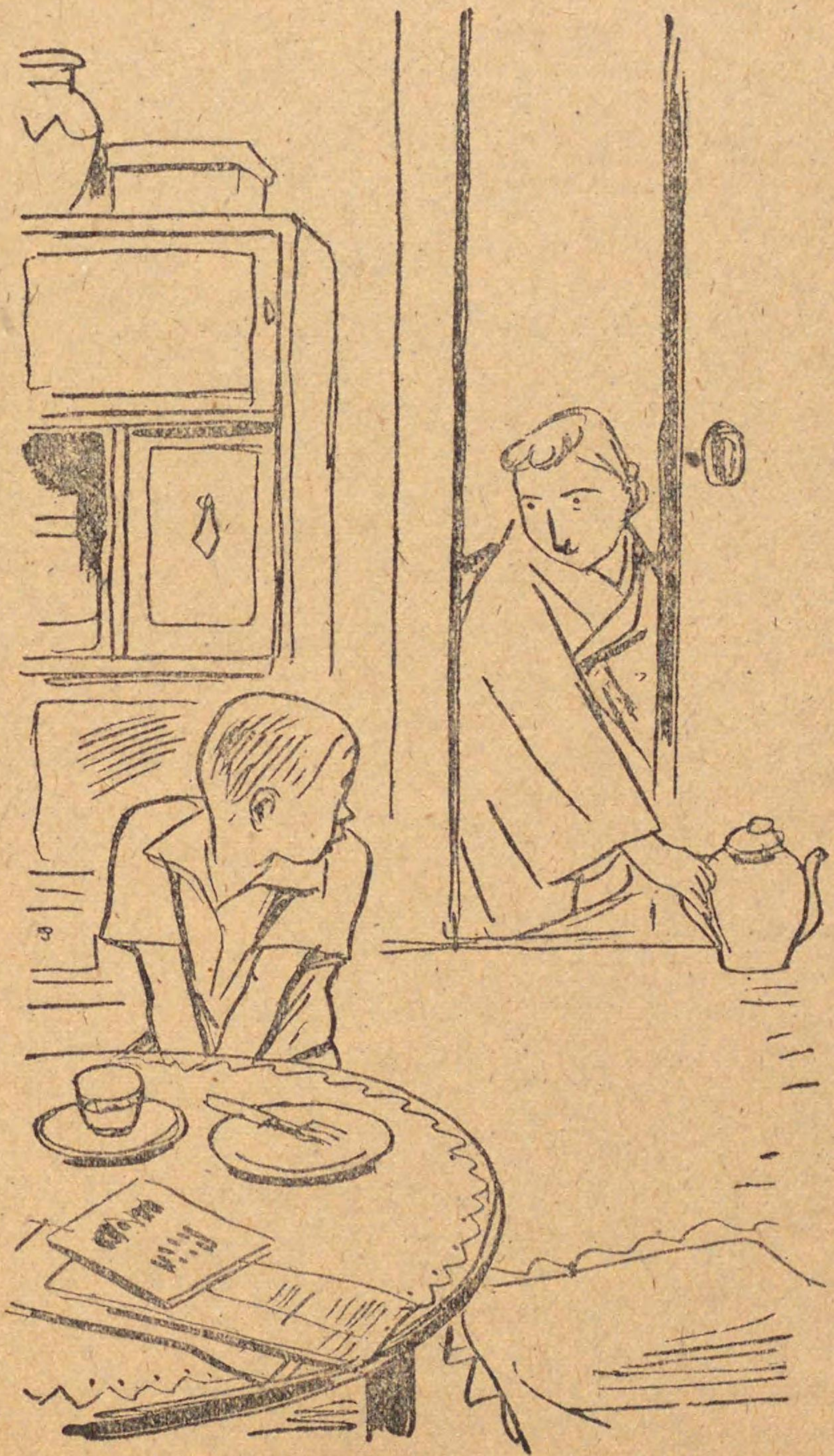
ころへゾウキンを取りにいこうと、身がまえた。

だが、あいたフスマから、すぐ、おかあさんの足はでてこなかった。思いがけない、ひくいところに、顔と目があった。目は、すぐ前の水サシを見つけて、そのままひよいとタロウの顔へ飛んできた。水サシを見つめているタロウの目と正面シヨウトツをしたわけだ。タロウは、めんくらって、目をそらした。

おかあさんは、タタミの上にヒザをついて、しとやかにフスマをあけたのだった。水サシは、おかあさんの手で静かにわきへどけられた。それから、ゆっくり立ちあ

がって茶の間へはいると、おかあさんは、またすわってフスマをしめた。
タロウはひどく感心した。これなら、水サシにけつまずく心配はない。それにしても、おかあさんは、どうして、じぶんが、あそこへ水サシをおいたことに氣がついたのだろう。おとなにはかなわない。

おかあさんは、水サシを、もとのとおり茶ダンスのタナへおいて、おチャボンをもつて座敷へ帰っていった。強い目でしかっただけで、タロウにはひとことも口をきか



なかった。

タロウは、おかあさんが、座敷へ帰るときにも、フスマのあけたてのたびに、いちいち、タタミへひざをつくのを見た。

そうだ。おかあさんは、お客さまがあるときには、いつでも、立ってフスマをあけることはなかったのだ。

タロウは、それを、すっかりわすれていたのだから、この実験はみごとに失敗した。

実験は失敗しても、タロウの計略（けいりやく）は、すっかり、おかあさんに見やぶられていた。タロウはお客さまが帰ったあとで、さんざんに、油をしぼられた。おかあさんが、どのくらい、足もとに氣をつけて歩くか、ためしてみたかったのだといったら、なお、しかられた。

雨のふる日はつまらない。そとへでてともだちと遊ぶこともできない。しかたがないから、タロウは、カバンをぶらさげて、三じょうのじぶんのヘヤへいった。はいるときに、おかあさんのまねをして、エンガワへヒザをついて、そっと、ショウジあをけてみた。だが、ショウジのかげには、むろん水サシもなんにもおいてなかった。自分ながら、バカらしくなって、こんどは、立ったまま、パタリとショウジをしめて、どんとツクエの前にすわった。

國語の本をひろげる。五年級の國語の本はうすっぺらだ。一時間たたないうちに、はじめからおしまいで読んでしまった。さっぱりおもしろくない。

あくびをかみころしながら、いちど読んでしまった先月の雑誌をひろげようとしたとき、とんとんと、ロウカを歩いてくる足おとがきこえた。足おとをおっかけるように、おかあさんの声がきこえる。

「ヒロシさんとフカシさんですよ。」

タロウは、急にいきいきした顔をして、いそがしく、あたりを見まわした。なんにも、うまいものが見あたらない。手あたりしだい、本ダナにのっていたハモニカを取って、ショウジのまえへほうりだした。

「ヒロシさんたち、ここだよ、早くきたまえ。」

ガラッとショウジがあいた。

「勉強かい、タロウ君。」

さきへはいつてきたのはヒロシだった。

だが、ヒロシは、「あいたっ!」といって、一步うしろへさがった。つまりかわりに、思いきり強く、ころがっているハモニカをふんづけたのだ。

ハモニカは、おもてにはってある金がつぶれて、ふるくなって弱っていた吹き口の木が二三カ所くだけてしまった。もう使いものにはなりそうもない。

こわれたハモニカを見て、ヒロシはあっけにとられた。

「ごめんよ、タロウ君、ぼく、ちっとも知らなかったんだもの。」

タロウは、思いがけない結果に、口もきけなかった。じぶんがわるいのだから、あ

こるわけにはいかない。

フカシが、ヒロシのわきから顔をだした。

「どうしたの、にいちゃん。」

「ぼくが、うっかりして、タロウ君のハモニカをふみつぶしちゃったんだよ。」
すると、タロウがおおきな声でいった。

「ちがうよ。ぼくが、うっかりして、じぶんのハモニカをふみつぶされちゃったんだよ。」

「いったい、どうして、こんなところに、ハモニカをころがしておいたのさ。」

「だから、うっかりしてだって、いっているじゃないか。ぼくは、だれかが、ハモニカにけつまずくだろうと思っていたのさ。ふみつぶすとは思っていなかったんだよ。どっちにしろ、ぼくが、わざとおいたのだから、ぼくがわるいんだ。ヒロシさん、あやまらなくてもいいんだよ。」

とにかく、三人は、こわれたハモニカをまん中において、まるくなってすわった。

それから、タロウは、けさ、ミソしるのナベをひっくりかえしてからのことを、すっかり話した。

「ふうん、そうか。じゃあジゴウジトクだね。」

「うん、ジゴウジトクだよ。」

「ハモニカ、鳴るかしら。」

フカシが、ハモニカをとりあげて吹いてみた。

けれども、つぶれたハモニカは、しわがれた音で、ヒューヒューいうばかりだった。

タロウのるすばん

1

カバンがあばれて、こまったから、ひだりのこわきにかかえて、タロウは、学校の門から自分のうちのげんかんさきまで走りつづけた。だが、げんかんのコウシを、がらっと、あけると、「あッ！」といって立ちすくんだ。おとうさんが、きれいな女のひととならんで立っている。タロウは、ホッペタの汗をふくこともわすれて、目を見はった。しかし、それは、ほんの二秒か三秒のことだった。

「あッ、おかあさんだ！」

タロウはバカげて大きな声をだした。

おとうさんがわらいだした。

「タロウめ、おかあさんが、あんまり、きれいになったので目をまわしたな。」

「いやなタロウさん。」

おかあさんが顔をうす赤くした。

タロウには、それがまた大変うつくしく見えた。

なにもかも、いつもとは大きなちがいだ。

おかあさんのヒタイの上には、うずをまいたおだんどが二つ三つならんで、ちらばっている毛なんて一本もない。少しちいさくなったように思われる顔は、ほっかり白くて、なんとなく、りんかくがハッキリしている。スツのところには絵のかいてある黒いきものに、青みがかった厚い帯をきりりとした姿は、いつもより五センチがた背が高く見えた。

タロウは、「いいなア。」と思った。

ミヨコが茶の間から、駆けてきて、おきわすれたライターを、おとうさんにわたし

た。

「これでしよう。」

「うん、ありがとう。」

おとうさんは、それをモーニングのチョッキのポケットに、しまった。

「じゃ、タロウさん、お願いしますよ、五時半までには帰ってきますからね。ミヨコちゃんもおとなに、おるすばんをするんですよ。」

おとうさんとおかあさんは、ならんで、でていった。

タロウとミヨコは、門のまえに立って、うすい朱（しゅ）の地に黄いろのコウシジマをそめた、おかあさんのバラソルが、少しかしいで、七月のまひるの日ざしをはねかえしながら、だんだん遠ざかっていくのを、いつまでも見送っていた。道のかどをまがって、バラソルが見えなくなると、タロウは、なんとということなしに、ほっとためいきをもらした。ミヨコも、何かいいたそうな目をして、にいさんの顔を見あげた。しかし、どちらも、ひとこともいわずに、だまって門のなかへはいった。

おとうさんとおかあさんは、おなこうどをたのまれて、結婚式へいったのである。

三時にお茶の会のごひろうがあつて、それをすませて、五時半にお帰りになるまで、タロウは全責任をおびて、るすばんをしなければならぬのだ。

2

でかける人たちのつごうで、うちにいたものは早おひるをすましていた。タロウの分のパンとアミのつくだにがおゼンの上のついていた。それをたべながら、タロウがミヨコに話しをする。

「待っておいで、きょうは、にいちゃんが遊んであげるからね。」

ことばのとおり、その日、タロウは、よいおにいちゃんだった。

はじめは、「サランガの冒険」を讀んでやって、それにあきると、こんどは絵をかいてやった。汽車の絵、電車の絵、汽船の絵。だが、人形をかいてくれといわれたにはこまった。タロウは、いままで、いちども、人形の絵をかいたことがなかったから

だ。

「西洋の人形かい。日本の人形かい。」

「日本のお人形がいいわ。」

タロウは、いよいよ、こまった。

そのとき、時計がボン・ボン・ボンと三つ鳴った。

「ミヨコ、人形の絵より三時のほうがいいだろう。アイス・キャンデー買ってきてあげるから待って。」

タロウは、いただいておいたお金を持って、マーケットへすつとんだ。

アイス・キャンデーは、あつというまに、タロウとミヨコのおなかのなかへ、とけ

こんでしまった。あつけなかった。

「あア、おいしかった。」

「一つじゃつまらないね。」

タロウは、妹のあいてをして、うちにひっこんでいるのが少しつまらなくなってきた。

た。

そこへ、ともだちが、さそいにきた。

「ニシカワ・クン！」

タロウは門のところへ駆けだした。

学校の運動場へドッジ・ボールをしにいかないかというのだ。

「きょうは、ぼく、るすばんなんだ。ぼくんちへあがつて遊ばない。」

「だって、ぼくがボールを持っていかなきゃ、みんながこまるもの。」

なるほど、ともだちは、大きな革ボールをぶらさげている。

「そうか——。」

タロウはいかにも残念そうだ。

「いけよ、いっしょに。いいだろう、ちょっとぐらい。」

空を見ると、よく晴れて向かいの家の屋根の上に、むくむくと雲の峰が立っている。

タロウは、うちのなかをふりかえった。心がぐらつきかけたのだ。だが、かれは強

くあたたまをふった。あやういところで氣をとりなおしたのだ。

「だめだよ。うちには妹つきりいなんだもの。」

ともだちは帰った。すると、こんどは、ミヨコが、おもてへ遊びにいてもいいかときいた。

「遠くへいっちゃだめだぞ。」

兄らしいことをいって妹をだしてやって、さて、ひとりつきりになると、タロウは、何をしたらいいのかわからないようなへんなはぐれた氣もちになった。教科書をだして勉強を試してみても、なんだか、おちつけないのだ。自動車の通る音や、軒さきでさえずるスズメの声や、どこかのうちで泣く赤ん坊の声は、たえずきこえてくるのに、自分のうちのなかだけは、妙にしずまりかえっている。その静かなのが、かえって、氣になってくる。

タロウは急に立ちあがって、ナワ飛びのナワを持って、はだして庭へとびおりた。はじめはゆるく、あとへいくほど速力を早めて、十五分か二十分ほど、ナワ飛びをし

たら、シャツが汗でぐっしよりぬれて、肩も足も、くたくたにつかれた。湯どのへいって、からだをふいて、半身はだかのみまで、タロウは座敷のまんなかには、大の字なりにぶったおれた。

それから、どれだけの時間がたったものか、タロウにはわからなかった。人の声があったような氣がして、ぼっかき目をあけてみると、ミヨコがまくらもとに立っていた。

「おかあさん、まアだ？ あたし、おなかがすいちゃったわ。」

その声をきくといっしょに、タロウのおなかが、グーッと鳴った。庭のほうを見ると、だいぶ、目の光もよわくなっているようすだ。

「なん時だろう。」

ふたりは茶の間へいって、柱の上の時計をながめた。六時を七八分すぎている。

かあさんたちは、とうに、帰ってきていなければならぬはずだ。

「おかしいなア。」

念のために、ふたりは、台どころへいって見た。むろん、そこでいそがしそうに働いているおかあさんの姿は見あたらない。

「きつと、電車がこんで、なかなか乗れないんだよ。もうじき帰ってくるよ。」

兄と妹とは、門のまえへでて、おかあさんたちが帰ってくるほうを、見つめたまま、しばらく立っていた。

すじ向こうの家の台どころ口のヘイの上に、うすむらさきのけむりが、ゆるく流れて、さかなを焼くらしい、いいにおいが、はこばれてくる。

「にいちゃん、あたし、ほんとに、おなかがすいちゃったの。」

ミヨコが、ちいさい声で、うったえる。

「そんなこといったって、おかあさんが帰ってこなきゃ、だめにきまつてるじゃないか。もう少しだから、おとなしく待ってるんだよ。」

妹をたしなめてはみるものの、実は、タロウも、はらがへって、たまらないのだ。どうもパンをたべた日には、おなかが早くへるような気がする。

同じところばかり見つめていたので目がくたびれてきた。空の青さが、だんだん、うすれてくるのも心ぼそい。

「ミヨコちゃん、うちへはいろいろよ。」

ふたりは、茶の間にちよこなんとすわって、また時計を見あげた。

六時半。

もう、約束の五時半より、一時間もおそくなっている。

「電車がショウトツして、おかあさんもおとうさんも死んじゃったのかしら。」

ミヨコが、ふいっと、そんなことをいいます。

それをきくと、タロウは、おこって大きな声をだした。

「バカ！ そんなことってあるもんか。もうすぐ帰ってくるさ。」

だが、ほんとうは、タロウも、ちょうど、ミヨコと同じことを考えていたところだ

ったのだ。だから、よけい腹を立てたのだ。

あとは、ふたりとも、だまっている。時計のフリコの音が、ひどく、耳につく。

タロウは、ずっと立って、台どころへいった。ゴトゴト、何かさがす音がきこえる。ミヨコも兄のあとを追った。

「なんかある、たべるもの——。」

「ない。なんにもないや。」

戸だなには、バンのかけら一つないのだ。

ガバリと音がした。ミヨコがトタンのコメビツをあけたのである。

「おコメあるわよ。にいちゃん、ごはんたけないの。」

「たけないさ、ごはんなんて。ごはんたけるの、うちじゅうで、おかあさんだけだよ。」

「あたし、ごはんたければいいんだけどなア。」

だが、タロウは、それには答えず、戸だなをドンとしまして、茶の間へ引きあげた。

そして、すわりぎわに、電燈のスイッチをひねったら、そのとたんに、時計が七時を

うった。

ミヨコはヘヤのすみにすわって、しくしく泣いている。タロウはおゼンに、ほおずえをついて考えている。おとうさんやおかあさんのことも心配だ。けれども、さしあたっては、おなかをすかして泣いている妹をなんとかしてやらなければならぬ。思いきって、ごはんをたいてみようかという気になりかけているのだ。

「精神一到何事か成らざらん。」ということばが、さっきから、タロウのあたまのなかをいったりきたりしている。だが、タロウはこのことばをそのまま信用する気になれない経験（けいけん）を持っているのである。

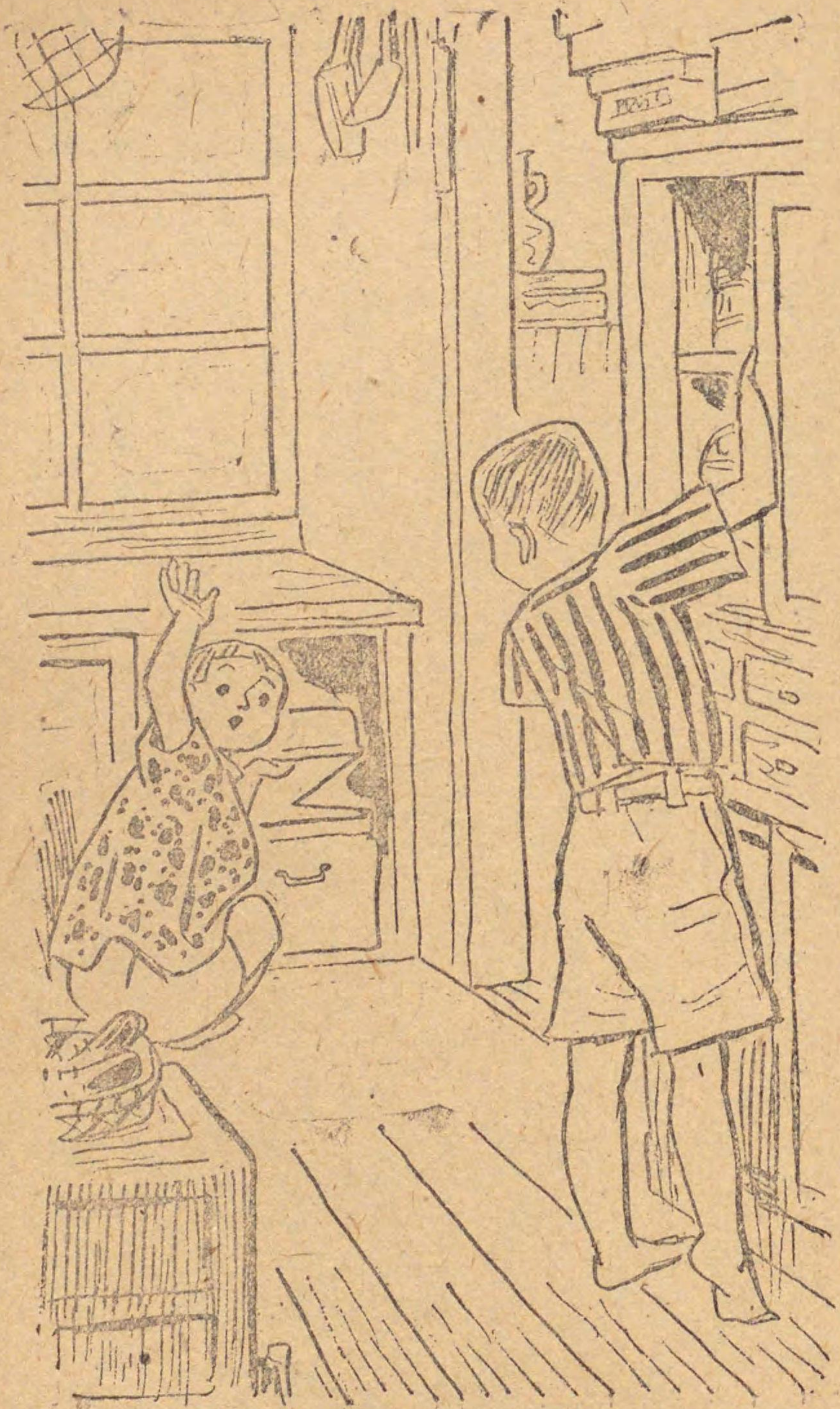
ことしの春のことだった。ニシカワ・タロウの一家とヤマネ・ヒロシの一家とが、いっしょに、フタコ・タマガワのほうへピクニックにいったことがあった。その時、

ヒロシとタロウは、何かのことで、みんなからおくれて、ふたりっきりで、広い原っぱを歩いていった。すると、思いがけなく、一メートルあまりの川幅の流れが、ふたりの少年のゆくてをさえぎった。ヒロシは身がるに、ひょいと、それを飛びこえた。だが、タロウは川岸まできて、動けなくなってしまった。とても、飛びこす自信はなかった。にごった水がふかそうに流れていた。

「タロウ君、飛べるよ。」

いいながら、ヒロシは、また、こっちがわへ飛びもどってきて、しりごみをするいところを、はげました。それから、もういちど、さきへ立って、飛びわたって見せた。いかにも、らくらくと飛ぶ。

タロウは、「精神一到何事か成らざらん。」ということばを思い出した。そして、かなり遠くまでもどって、そこから走りだした。じゅうぶん調子をつけて、よし！と、できるだけの力で地をけって飛んだ。だが、かれの足は、もう少しというところで、向こう岸の土をふみはずした。バラバラとくずれおちる小石といっしょに、タロウの



からだは川のなかで水けむりをあげた。さいわい、水はあんがい浅かったので、おぼれるようなことはなかったが、みぎの向こうズネを、したたかに、すりむいた。

いくら全力をつくしても、タロウには、ヒロシと同じだけの飛ぶ力がそなわっていないのである。タロウはこの経験から、人には、いくら熱心にやろうと思っても、できないことがあるということを知った。精神力だけでは、カンタンに片づかないことがあるのだ。

タロウは、みぎ足をのばして、うす白く残っている、スネのきずあとをなでながら、なお考えつづける。おコメはあるんだ。マキだってあるんだ。たいて、たけないことはあるまい。ごはんさえたければ、妹を泣かしておくことはないんだ。それに自分だって、こんなひもじい思いをしているにはおよばないのだ。おとうさんとおかあさんが、もし、おそくなって、おなかをすかして帰っていらっしゃれば、どんなに喜ぶか知れやしない。

だが——と、タロウは、あらためて考える。自分は、ごはんをたくことについて、どれだけ知っているだろう。台どころのガラス戸のそとのカマドへおカマをかけて、マキをもやせばいいのだということは、わかっている。では、どれだけ分量のおコメをカマのなかへいれたらいいのか。晩のごはんには、六合たかなければならないと、いつか、おかあさんが、おとうさんに話しているのをきいたことがある。コメピツのなかにころがっている紅茶チャワンが、一合マスの代りになっていることも、わかっている。だが、どのくらいの時間、火にかけておいたらいいのだろう。なんとかして、それがわかる法がないものだろうか。じっと考えていると、ひょいと、あたまに浮かんできたことばがある。

「今、おカマをかけたところですから、もう三十分ばかりするとごはんになりますよ。」

タロウが、「おかあさん、ごはん、まだ？」とせがむとき、おかあさんは、いくどか、そういう返事をなすったことがある。よし、そうだ、六合のおコメをカマにいれ

て、三十分火をたけば、ごはんはできるにきまつている。

「ミヨコ、泣くな。おにいちゃんが、ごはんをたいてやるよ。」

ミヨコは、びっくりして、泣くのをやめた。兄の顔をきよとんと見つめる妹の大きな目から、たまっていたなみだが、ぼろりとひとしずくおちた。

5

タロウは、紅茶チャワンに六つコメをはかりこんで、八分目ほど水をいれると、いきなり、カマにみぎ手をつっこんで、かきまわした。コメは、といでから、たくものだということは、ちゃんと心えていたからだ。水をあげようとすると、コメがいっしょに流れだしそうになったので、おどろいた。そこで、コメがカマの底におちつくのを待ってから、静かに水をあげた。二三度といでから、いよいよ、カマをカマドにかける段になって、はたとこまった。コメに水をいれてたくことは知っていたが、どのくらい水をいれておいてよいものか、まるで見当がつかなかったからだ。

今まで、自信ありげに、どんどん事を運んでいたタロウが、カマのふちに手をかけたまま考えこんでしまったので、そばで見ているミヨコが心配しだした。

「にいちゃん、どうしたの。」

「うん。」

考えこんでいるタロウの目のまえに、おカマのなかへ、シャモジをさかさに立てているおかあさんの姿が見えてきた。シャモジで、おコメの上に張ってある水の深さをはかっているのだ。水の深さは二、三センチしかなかったような気がする。ええイッ！ 二センチ五ミリでやってみる。

タロウは、おコメをたいらにならして、センチざしを持ってきた。そして、おコメまでの水の深さを正確に二センチ五ミリにして、カマをカマドにかけた。時計をしらべると七時二十分だった。新聞紙を二枚まるめて、その上にちいさなマキをのせると、いいあんばいに火はすぐ燃えついた。これで、七時五十分まで火をたきつづければ、まア、いいわけだ。

タロウは、注意ぶかく、火勢がよわくなりそうだと、すぐ、マキをおぎなうようにした。

ミヨコは、そばにしゃがんで、熱心にカマを見張っている。とうに、目のなみだはかわいていた。

そのうちに、うまそうな、ごはんのにおいがぶんぶんしてきた。タロウとミヨコは、思わず顔を見あわして、にっこりわらつた。

だが、すぐに、重いカマのふたが、もくもく、持ちあがりはじめたと思うと、白い湯気が、ふうふう吹きはじめた。

タロウはあわてた。

「ミヨコちゃん、時計、時計を見てきて。——ああ、きみじゃだめだ。ぼくが見てくる。」

茶の間へかけこんで見ると、時計は、まだ七時四十分にしかなっていない。

「へんだなア。」

いいながら、カマドのまえへ帰ってきたタロウは、こまりきった顔をして、ふたのすきから吹きだす湯気をながめていた。

「もう、おろしちやおうか、ミヨコちゃん。」

相談をされても、ミヨコには返事のしようがなかった。

タロウは、とにかく、カマをおろそうと決心した。しかし、よわったことには、火のように熱いカマのどこに手をかけたらいいのかわからなかった。かれは、まず、勇敢にカマのふたをはずした。それから、ふきを何枚にも折ってそれでふちをつまんで、カマを板の間のカマシキの上まで運んだ。そして、またすぐに、ふたをカマにかぶせた。どうも、ふたをあけておいてはよくないような気がしたからである。

カマドから、燃えさしのマキを引きずりだして、ジュウ、ジュウ、水をかけて消してしまおうと、やっと少し気もちがおちついた。

「さア、ミヨコ、ごはんをたべよう。」

いいながら、タロウは、顔の汗を、ソデでぐいとなでた。

茶の間の電燈の下で、あらためておカマのふたをとってみると、なかは、たしかに、おいしそうなごはんだ。

「おにいちゃん、えらいなア。ひとりで、ごはんたけるのね。」

「えらかないよ。ごはんぐらいたけたって。それよか、早くたべよう。」

タロウは照れくさそうな顔をした。

おかすがなかったので、ふたりとも、おショウユをかけてたべた。少し、いつもより水っぽかったが、たしかに、ちゃんとしたごはんだった。そのうまいことったらなかった。

ふたりが、ちょうどいっしょに、一ぜんめのごはんをたべ終わったとき、門のあく音が、ガラツときこえた。タロウもミヨコもチャワンをなげだして立ちあがった。げんかんへでると、おかあさんが、ひと足タタキのなかへふみこんだところだった。

「ごめんなさいね。地下鉄が停電して、どうすることもできなかったの——。」

おかあさんは、青い顔をして、ハア、ハア息をきらしている。こどもたちのことが心配で、駅からかけどおしにかけてきたのだ。

今まで、きげんよくしていたくせに、ミヨコは、おかあさんの顔を見ると、わっと泣きだして、ハダシでタタキへ飛びおりて、おかあさんのひざへかじりついた。

まもなく、おとうさんも帰ってきた。聞いてみると、地下鉄の停電ぐらいこまるものはない。まっくらなトンネルの中へは、あぶなくておるすわけにはいかないというので、動かない電車のなかで、なん時間でも待っていないければならないのだ。

タロウは、おとうさんに、たいへんほめられた。

「タロウ、きょうはおおできだったぞ。いざとなったら、自分のことは、なんでも自分でやる。それが、ほんとうの民主主義國家の少年だ。——おい、カネコ、これからのこどもにはメシのたきかたぐらい、なるべく早くから教へておかなきゃいけないね。」

海で

「さア、もう一度やろう。」

砂の上に腹ばいになってやすんでいたコロクが、むっくり起きあがった。

「うん、やろう。」

「やろう。」

ススムもヤスオもタロウも、ヒロシも、いきおいよく、飛び起きた。

まっさちに晴れた空から、こまかくくだった銀の粉のように、きらきら光りながら、太陽がふりそそぐ。海も青い。その青い海のはずれに、むくむくと白い雲の峰が

立っている。

「さっきのつづきだから、ススム君の鬼だぜ。」

どなりながら、砂だらけのからだのまま、タロウがまっさきにかけてだす。みんなも、まげずに走りだした。

コロクの思いつきで、きょう、はじめて、やってみたのだが、水のなかの鬼ごっこは、ひどく、みんなの氣にいった。

海のなかに赤い旗が三本立っている。そのうちがわを、みんなは、泳ぎまわる。泳ぎつかれて立つと、水は肩のところまでくる。急に鬼が泳ぎよってきたとき、走って逃げるといふわけにはいかない。水がじゃまして走れないからだ。どうしても、泳いで追いかけて、泳いで逃げなければならぬ。だから、泳ぎのへたなものは、つかまりやすい。鬼がもぐってきて、ふいに足をつかまえられることもある。そうかと思うと、水にぬれた丸い肩が、つるりとすべって、あやうくたすかることもある。——あもしろい。

そこで、つかれたからだを、じゅうぶんやすませて、もう一度やろうということになったのだ。

だが、みんなといっしょに海へはいろうとしたヒロシは、追っかけてきた弟のフカシに、波うちぎわで、手くびをつかまえられた。

「にいちゃん、ぼく、つまんないよ。」

四年生のフカシは、どういうわけか、まだ泳ぎがおぼえられないのである。だから、鬼ごっここのなかまへ、はいれないのだ。

ヒロシは、こまったと思う。けれども、自分は、早くいって鬼ごっこをしたいのだ。

「砂でトンネルをこしらえて遊ばいいじゃないか。」

「ひとりでトンネルこしらえて、つまんないんだよ。」

そのとおりである。フカシは、さっき、にisanや大きいとこたちが、おもしろがって鬼ごっこをしているあいだじゅう、トンネルもお城も、こしらえあきるほどこ

しらえたのだ。

「じゃあ、浅いところで、バチャ・バチャやって泳ぎのけいこをしてごらん。」

ヒロシは、なんとかして、弟をおっぱらおうとする。ところが、フカシは、なかなか、うんといわない。

「ひとりじゃだめだよ。にいちゃんが教えてくれなきゃ。」

「こんど教えてやるよ。今はだめ、みんなが待ってるんだから。」

そのとき、ヤスオが、手をあげて、「ヒロシ・クーン。」とよぶ声がきこえてきた。

「ほら、よんでるだろう。さあ、ひとりで、なんかして遊んでおいで、あとで、泳ぎ、教えてやるから。」

もう、フカシは、それに答えなかった。悲しそうな、うらめしそうな目で、じつと、兄の顔をながめている。ヒロシは、それをふりきって、海のなかへ、はいつていくことはできなかった。

「ね、いいだろう、フカシ。にいちゃんのこと、みんなが待ってるんだから——」

ヒロシは、必死になって、弟をなっとくさせようとする。
すると、いきなり、フカシが思いがけないことをいいだした。

「ぼく、うちへ帰りたんだよ。」

ヒロシはあわてる。

「うちへ帰ったって、だれもいないぜ。」

「いるよ、おとうさんだっておかあさんだって、タカシにいさんだって——。」

「なあんだ、東京の自分のうちへ帰るっていうのか。」

「だって、カマクラ、つまんないんだもの。——だあれも遊んでくれないから。」

それをいうとき、フカシの顔は今にも泣きだしそうだった。ヒロシは急に弟がかわいそうになった。

海のほうを見ると、ヒロシを待ちきれないで、四人のいところたちは、キャツ・キャツさわぎながら、鬼ごっこをはじめていた。

「バカ、泣くやつあるか。」

ヒロシは、らんぼうにしかったが、かれの手は、言葉とは反対に、やさしく、弟のはだかの肩にかかっていた。

「泳ぎ教えてやるからな、今すぐ。」

「ほんと？」

フカシの目が、げんきんに、もうわらいだしそうになる。

「ちょっと、ここで待っておいで。みんなにことわってくるから。」

「うれしいな。早くね。」

「うん。」

ヒロシは浅いところをジャブ・ジャブ歩いて、それから、カエルのように、ひらべつたくなって、みんなのほうへ泳いでいった。

「にいちゃん、泳ぎうまいんだなあ。ぼくも、早く、あんなに泳げるようになれると
すいな。」

そう思いながら、フカシは兄の姿を目で追った。

弟と遊んでやるから——ヒロシは、コロクに、そうことわって、すぐ引きかえして
きた。

「フカシ！ こっちへおいで、教えてやるから。」

ヒロシは、水のなかから、大きな声で呼んだ。

「そこ、深くない？ だいじょうぶ。」

フカシは、どなりかえしながら、こわそうに、兄のほうへ近づいていく。

「深いものか。見ろ、にいちゃんの腰のとこつきりないじゃないか。」

弟がそばへくると、ヒロシは両手をつかんで、いいきかせた。

「いいかい、フカシ、水をこわがっちゃだめだぞ。ここは浅いんだし、にいちゃんか
ついているんだから、ちっとも、こわいことないんだから。」

フカシは、からだを浮かすことも知らない。泳ぎをはじめるとき、だれでもが、す
ぐのみこむ、あのちょっとしたコツが、いまだに、のみこめないのだ。

「さア、にいちゃんの手につかまって、足をバタバタやっごらん。」

「さよよ、けいこがはじまった。」

フカシの足は、むやみに水をはね飛ばす。五本も六本も足が生えてるように見える
ほど、はやく動く。ヒロシの顔は水だらけだ。

「そんなにはやく動かしたら、すぐ、くたびれちゃうよ。もっとゆっくり——うん、
そのくらい。いいか、手をはなすぞ。」

フカシは、自由になった両手で、夢中になって、水をたたいた。だが、いつのまに
か、足が下へさがって、われにもなく、海ぞこの砂をふんで立った姿勢になっている
のだ。

「あたまを、水の上へだしたがってはだめだよ。顔ごと、あたまを水のなかへなかへ
とつっこむようにしてごらん。面かぶりって、これが一番からだか浮きやすいんだ。」

だが、フカシには、思いきって、水のなかへ顔をつっこむことができない。だから、いくどやっても、手をはなされると、からだかたてになって、足が砂にくっついてしまう。

「だめだよ。これじゃアいつまでたつたって、泳ぎはおぼえられやしないぜ。——ア、そうだ。」

ヒロシは、いいことを思いついた。それは、水のなかに立ったまま、顔を水につっこませることだった。

ヒロシは、弟の手を引いて、「だいじょうぶ、だいじょうぶ。」といいながら、そろそろと、チチまでぐらいの深さのところまで進んでいった。

「いいかい。こうやって、ぎゅっと、海へ顔をつっこんでごらん。これなら、できるだろう。息さえしなきゃ、水は、はいつてこないよ。」

ただ、立ったまま、顔を水におしつけるだけのことだ。これは、すぐ、フカシにもできた。

「よく息をすいこんで置いて、なるべくながく、つけて置いてごらん。」
いくどかやっているうちに、だんだん、ながくやれるようになった。

「こんどは、目をあけて、やってごらん。水のなかで、とてもきれいなんだよ。目から、水は、はいつてきやしないから、だいじょうぶだよ。」

なるほど、水のなかは、青くきらきら光って、たいそうきれいだった。

「とつても、きれいだね。」

フカシが、はじめて、うれしそうな声で、はればれといった。

ヒロシもうれしくなった。

「こんどは、耳をおさえて、すっぱり、水のなかへしゃがむけいこだ。」

いいおわるといっしょに、ヒロシのあたまは、そっくり、水のなかへ沈んでしまった。すぐに、あぶくが、二つ三つ、ぶくぶくと、あがってきた。

あつけにとられているフカシの目のまえへ、兄が顔をだして、手のひらで、ぶるんと水をこき落した。

「やっpegらん。」

フカシは氣が進まなかった。しかし、ぐずぐずしていたら、兄にどなられそうな氣がした。そこで、思いきって、耳をおさえて、腰を落とした。これでよかろうと、ちゆう腰になったところを、強い力で、あたまをぐいとおしこまれた。すると、なんにも考えるひまもなく、その力を突きのけるようにして、立ちあがってしまった。胸がどきどきして、息はずんでいた。

「だめだよ、フカシ、あたまを、すっかりむぐらせなきゃ。——さあ、もういちど。にいちゃんというとおりにしなきゃ、泳ぎ、おぼえられないぞ。」

最後のひとことが、フカシに勇氣をふるい起こさせた。こんどこそ、思いきって、ぐうっと身を沈めた。おさえた耳たぶのそとを、水が、ごうごう音を立てて流れていく。

「よし、よし。」

息がつづかなくなって、水の上へ顔をだすと、兄がほめてくれた。

そのつぎには、今のようにして、もぐってから、うんと足をちぢめて、海の底から足をはなすけいこだった。

ふしぎなことに、そういうふうになると、自分のあたまがウキになって、水のなかで、からだ全体がちゆうに浮いた。

フカシは、足をのばして立ちあがると、喜びに全身をふるわして、兄にいった。

「にいちゃん、浮いた。ぼくのからだ、水のなかで浮いたよ。」

「浮いたろう。あたまさえ水のなかへつっこめば、浮くにきまつてるんだよ。」

それから、あらためて、面かぶりのけいこがはじまった。

「手をはなしたら、さかだちをするくらいのもりで、あたまをつっこむんだよ。」

ヒロシは弟をはげました。

フカシも、もう、水のなかへもぐることを、おそろしいとは思わなかった。

「そら、はなすぞ。しっかり。」

フカシは、できるだけ、あたまをさげて、両手、両足をはげしく動かした。とたんに、大きな波がくずれてきて、沖のほうへむかって面かぶりをやっているフカシのあたまを、強くたたいた。ものはずみというのであるか。足が、そらをけあげるように、波の上へ、によきりでたと思うと、フカシのからだは、もろに、でんぐりがえしに、ひっくりかえった。

フカシは、わあっと思つた。われ知らず目をつぶつたのだらう。あたりがまっくらになつて、耳がごうつと鳴つた。死ぬぞと思つたとたんに、塩みずが、どつと、口をわつて流れこんだ。

だが、次の瞬間（しゅんかん）には、フカシのからだは、ヒロシの腕にだきあげられていた。少し、のどがいがらっぽくて、鼻がシュン・シュンするだけのことだ。あい変らず、空はきれいに晴れわたつていて、波のあいだで遊んでいる人たちの声がガヤガヤきこえてくる。海のなかで感じたほどは、水ものんでいないらしい。

フカシを腕からおろして、ヒロシがきいた。

「どうした、フカシ。」

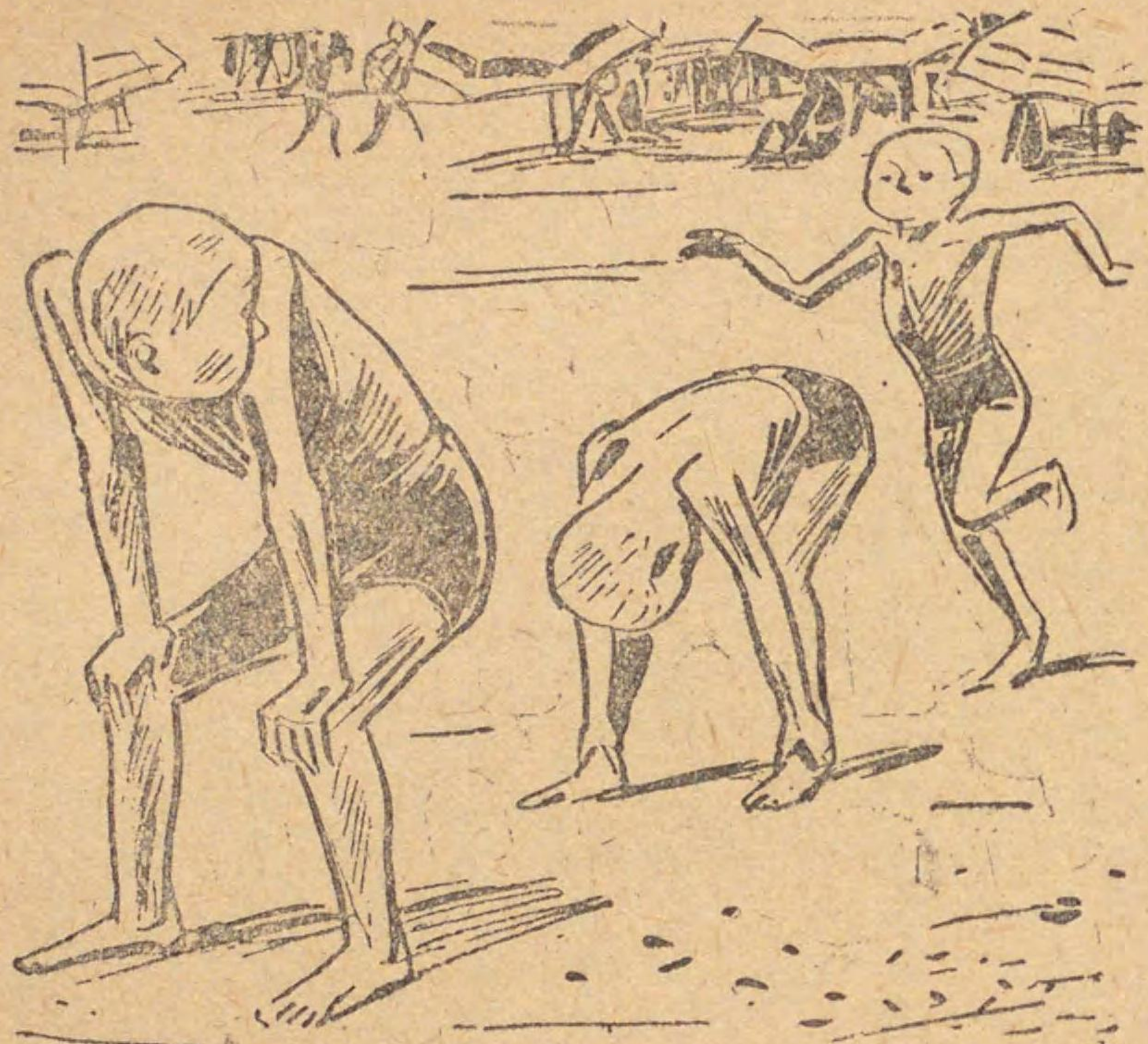
「水、のんじやつた。死ぬかと思つた。」

「そんなに、すぐ死ぬもんか。いちどぐらい水をのまなきゃ、泳げるようにはならないよ。」

「水、のんでも、死なないかい。」

「生きてるじゃないか、ちゃんと。うんと
のまなきゃ平氣だよ。」

しかし、ヒロシも、実は、少しおどろいたのだ。だから、ヒロシのほうから、泳ぎのけいこは、きょうはこのくらいにしてお



こうといいだして、ふたりは砂の上へあがった。

みんなも、まもなく、あがってきた。

しばらく休んでから、こんどは、みんなでウマ飛びをして遊んだ。ところが、フカシは、二三どウマになったり飛んだりしているうちに、急に胸がわるくなって、がばがばと塩みずをはきだした。

「まるで、おとぎばなしのカエルみたいだね。」

ヤスオがいったので、みんながわらいだした。いちどに気分がさわやかになったフカシも、声をあわせて、わらった。ヒロシも、わらいながら、静かに、弟の背なかをさすってやった。

八月の空は、あい変わらず、まっさおに晴れわたっている。日が暮れるには、まだ、だいぶ、まがありそうである。カマクラのコロクのうち別荘にとまっている、この六人のいとこたちは、きつと、まだしばらくは、たのしく遊びつづけることだろう。

にわか雨

1

あっちでも、こっちでも、見物人がぼつぼつ立ちあがりだしたので、ハジメは映画がもう間もなく終ることを知った。「世界の母」という、きょうの映画は、ハジメにはいっこうおもしろくなかった。自分も、氣の早い見物人たちといっしょに、さかさ立って、涼しいところへでていきたいくらいだった。しかし、ハジメは、そのとき、いつもおとうさんからきかされていることを思いだした。劇や映画を見にいったとき、さちんと終りまで静かに見ていられない人は、ほんとうの見かたを知らない野蠻人だ。そういう人は、まじめな見物人たちのじゃまになるから、劇場や映画館へいく

資格（しかく）がないというのである。ハジメはこのおとうさんの考えをもっともだと思っていた。だから、かれは、あくびをかみ殺して、左どなりの席にいるおとうさんの顔を見あげた。ま正面をむいて、じっと画面に見いていた。こんどは、右がわの弟のツギオのほうをふりかえった。すると、ツギオの目が「つまらないね。」といているのが、うすくらがりのなかでもよくわかった。

“THE END”（ゼ・エンド）という字が大きく出て、映画は終わった。東京一の映画館の二千人以上の見物人が、いちどに、どっと立ちあがった。みんなが急に用ありげに出口へいそぐ。いつもは、一刻をあらそうようにして早くでたがる人たちをわらっていたおとうさんも、きょうは、変にせかせか人をわけるようにして、出口へいそぐようすだ。自分たちをつれてきていることをわすれたのではあるまいかと、ハジメは心ぼそくなった。

「はぐれちゃだめだよ。」

いいながら、ハジメは弟の手をとって、おとうさんのあとを追った。だが、廊下への出口でおおぜいの人にさえぎられて、少しおくれた。廊下へでて見ると、おとうさんのバナマ帽子は、四五メートルさきをずんずん歩いていく。あいだにはぎっしり人がつまっているので、駆けだして追いつくことはできない。階段をおりるとき、おとうさんは、ふりかえって、目でふたりをさがした。何か自分たちにいいたいことがあるのだということは、ハジメにわかった。だが、おとうさんの目はふたりを見つめることはできなかつたらしい。また、むこうをむいて、どんどんおりていく。今までより、いそぎだしたと思ううちに、まえかがみになったその姿は、すぐに人むれのなかへ消えてしまった。けれども、ハジメはツギオの手を引いているのだから、人をかきわけていそぐわけにはいかなかった。

おもてへ出ると、いちどに、すっと涼しくなった。ハジメは弟の手をはなして、ハンケチで顔をふいた。あとから出てくる人にぶつかられて、びっくりして少しわきへよった。それから、おとうさんの姿をさがした。どこにも見えない。映画館からでた人はどんだん四方へちっていく。そのちっていく人たちのなかに、おとうさんのうし

る姿は見えない。

ハジメとツギオは、少し不安になってきた。特に、ハジメは、映画が終ってからあとのおとうさんの、いつもとちがったようすと考えあわせて、おちつけなかった。

「おとうさん、どうしたんだろう、おにいちゃん。」

「駅へいってみよう。」

じっとしていられない気もちで、ハジメは弟の手を引いて、半分駆けるようにして、駅の改札口へいってみた。

いない。いくらさがしてみても、影も形もない。おとうさんが自分たちをおいて、さきへお帰りになるはずはないのだが――

ハジメは、にわかには悲しくなつて、涙がでそうになった。

「へんだね。」

弟のほうはわりに落ちついている。兄という、たよりにする人があるせいかも知れない。それだけに、ハジメはいくじなく泣きだすわけにはいかないのだ。

兄弟はまたすぐ映画館のまえへ引きかえしてみた。いま出てくるか、いま出てくるかと、ときどき館のなかをのぞいたりして二三分待ってみたけれど、おとうさんは出てこない。たまたまなくなって、また駅へいってみることにした。さっきは、映画館の左がわをとおつていったから、こんどは右がわをまわつていった。途中で、であうかも知れないと思つたのだ。改札口のあたりには、人を待ちあわせる人が三四人いた。けれども、ハジメたちのおとうさんはいなかった。

いくど、駅と映画館のあいだをいたりきたりしたかわからなかった。いつのまにか、ハジメの顔はしんけんな引きしまった表情になっていた。そして、ツギオはべそをかきはじめていた。

「おとうさん、さきに帰っちゃつたのかね。」

「そんなことないよ。」

「じゃ、どうしたんだろ。」

「――」

「おにいちゃん、電車にのるお金もっているの？」

「ないよ。ガマ口、ツクエの引きだしにおいてきちゃったんだもの。」

「どうする？ おうちへ帰れなかったら。」

「だいじょうぶだよ。おとうさん、どっかから出てくるさ。」

「いつ？」

そうきかされると、ハジメも返事にこまった。実は、自分でも、これから自分たちがどうなるのか、まるで見当がつかないのだ。泣きだしたいのを、やっと、がまんしているだけのことだった。

「もう少し待ってみようよ。」

そういって、なぐさめるのがせきのやまだった。

ふたりのきているシャツの背なかは、さっきからせかせか歩きまわったので、汗で



ぐっしよりぬれていた。こうして、駅のまえから動かないことにきめて、じっと立っている、その汗が冷えてきて氣もちがわるい。日が暮れかけてきたせいばかりでなく、あたりが急に暗くなってきた。氣がついてみると、うすずみ色の雲が空いっぱい、ひろがっている。変につめたい風がふきはじめた。どうつとふいてきたと思うと、ちよつとやむ。また、どうつ、どうつとふいてくる。そのつめたい風にふき送られてきた人が、あとから、あとから、あわただしく駅のなかへすいこまれていく。みんな近づいてくる台風から、いそいで逃げていくのだ。柱にもたれて、しょんぼり立っているふたりの少年に、注意をむける人はひとりもない。

おとうさんの姿はいつまで待ってもあらわれてこなかった。

そのうちに、おおつぶな雨がパラパラふりはじめてきた。

3

こらえきれなくなって、だまって便所へよっている間に、こどもたちを見うしなっ

たハジメのおとうさんは、むろん、夢中になって、ふたりをさがした。しかし、運のわるいときは、しかたのないもので、父とこどもたちとは、どこまでもいきちがいのなつた。父が映画館から出てきたときには、もうハジメたち兄弟は駅へいってしまっていた。父があとを追ったときは、こどもたちは、ちがった道から映画館のまえへ引きかえすところだった。どっちかが、じつと、駅か映画館のまえにおちついていればよかったのだ。しかし、そこに氣がつくためには、どちらもあわてていた。心配のため、どうしても一カ所におちついてはいられなかった。そうこうするうちに、小一時間もたつて、日が暮れかかるといっしょに、空もようがあやしくなった。おとうさんは、ひよいと、こどもたちは、電車に乗ってさきに帰ったのじゃないかという氣がしてきた。むろん、あいてが三年生のツギオだけなら、そんなことは考えない。だが、六年生のハジメは自分のガマ口も持っているはずだし、そのくらいの氣ばたらきはあはずだ。よし、また、かりにあとへ残してきたにしても、なんとかして帰ってくるにちがいない。いや、帰ってこられないようないくじなしでもこまる。父親はそう考

えたので、とうとう、ひとりで電車に乗ってしまったのだった。

電車に乗っているうちからふりだした雨が、三十分ほどして、おりるときには、すさまじい、ふきぶりになっていた。おとうさんはパナマの帽子をぬいで、まわ着のうちがわへかかえこむと、白い雨あしのなかへ、いきなり、かけこんだ。いっときも早く、こどもたちが無事に帰っているかどうかを、たしかめたかったからである。

ふつうに歩いて十五分ほどの道を七八分でかけもどると、おとうさんは、キムラ・ゴヘイというヒョウサツの出ている門をばげしくあけた。白服の背なかまでハネがあがっている。

「おい！ ハジメたちは帰ってるか。」

ゴヘイさんは、げんかんのコウシに手をかけるといっしょに、大きな声でどなった。

飛びだしてきた奥さんが、びっくりした顔をした。ヤマネ・ヒロシのおとうさんと、どこか似ているところがある。ヒロシのおとうさんの一番末の妹だからである。

「まだですよ。こどもたち、どうかしたんですか。」

「おれが、だまって便所へいってる間に、はぐれちゃったんだ。——そうか。まだか。」

「どこではぐれたんですの？」

「映画からでるときなんだ。すぐ駅の近くだから、どこへもいくはずはあるまい。おっつけ帰るだろう。——ハジメは金を持ってるんだろうな。」

「さア——。たぶん持ってるとは思いますが、ちょっと待って——。」

ハジメのおかあさんは、おおいそぎで、奥のこどもベヤへ引きかえしていった。すぐ、奥から、調子のはずれた声がきこえてきた。

「持っていませんよ、あなた。」

駆けもどってきたおかあさんの手には、ハジメのちいさなガマ口があった。

「しまった！」

ゴヘイさんは、のどでもしめられるような声を出した。

「お金もなしで、ツギオとふたりつきりどうしているでしょう。」

おかあさんは、もう、おろおろした声をだす。

「心配するな。すぐむかえにいつてくる。」

「だって、このあらしですもの。」

「あらしぐらいなんだ。おい、レイン・コートを持ってこい。それから、こどもたちのカッパだ。どうせカサはさせやしない。」

ゴヘイさんは、そのまに、ズボンをまくりあげて、クツをぬいでゲタをはいた。

「おい、こどもたちのゲタをだせ。ズックのクツじゃあ、じくじくして気もちがわるいだろう。」

ごうつと風がふいていく。大きな声でなければ話しができないほどの、すさまじい音を立てて、雨はふりしきっている。

ゴヘイさんは、カッパとゲタのつつみで、レイン・コートの腹をタヌキのようにふくらしめて、また、あらしのなかへでていった。

ハジメとツギオは、おきざりにされた駅の柱によりかかったままの姿で、まだ立っていた。あれから、もう二十分ほどの時間がたっていた。ツギオは心配そうに、兄の顔を見つめている。ハジメは、ひどいあらしのために、さすがにゆきさの絶えた道路にはねる雨けむりを、じっと、見つめている。しかし、かれは、決して、ただボンヤリ雨を見つめているわけではなかった。なんとかして、早くうちへ帰れるようにしなければならぬと思つて、しきりに、その方法を考えているところだった。

——お金がなくて電車に乗れないのだから歩いて帰るほかない。だが、どう歩いたらいいのか道がわからない。それに、歩いているうちに夜なかになってしまふにきまつている。おなかもすいてくるにちがいない。してみれば、歩いて帰ることはできないのだ。

——お金をかりるのがいい。だが、この近くに知ってるうちは一軒もない。見ず知

らずのものにお金をかしてくる人があるだろうか……そうだ、交番へ行って、おまわりさんにたのむのがいい。おまわりさんなら、きつと、かしてくるにきまつている。映画館のまえの橋を渡るとすぐ、たしか、交番があつたはずだ。もう少しこぶりになつたら、あすこへ行って、たのんでみよう。

「ツギオ、おにいちゃん、交番へ行って、おまわりさんにお金をかしてもらおうよ。」

「かしてくれるだろうか。」

「そりゃ、かしてくれるさ。」

ハジメがそういう終るか終らないうちに、まつ白な二つのかたまりが、雨の幕をつきやぶって、ふたりの目のまえへ、すばらしいいきおいで飛びこんできた。ふたりは、思わず、「うわっ。」と声をあげた。白いかたまりのほうでも、その声におどろいて、うしろへ飛びのいた。そして、すつと立ちあがったのを見ると、それは白いビーカーをかぶって、白いシャツを着たふたりの少年だった。

「タカシさん！」

「ヒロシさんだ！」

ハジメとツギオとが同時によるこびの声をあげた。

飛びこんできたふたりの少年は、ヤマネ・タカシとヒロシの兄弟だったのだ。ふたりは銀座のある店へ画の展覧会を見にいった帰りだった。若いふたりは、べんべんと雨のやむのを待っている氣になれなかったのだ。

ハジメは事情をかいつまんで話した。

もちろん、キップはタカシが買ってくれた。

ハジメ兄弟の乗る電車とヒロシ兄弟の乗る電車とは、方向が反対だった。ハジメたちの乗る電車がさきに来た。

「きみのおとうさん、きつと、さきへ帰って、心配して待ってるよ。きみがガマ口をツクエの引きだしにおいてきたことなんか、ご存じないにきまつてるからね。」

タカシは、そうなくさめて、ハジメたちを見送ってくれた。

電車が動きだすと、ハジメがツギオにいった。

「いとこがどっさりあるって、いいもんだね。え、ツギオ。」
「うん、いいね。」

ふたりが駅へついたときは、あらしのいきおいは、いままでより、もっとはげしくなっていた。雨はコンクリートの道をたたいて、もうもうと白けむりをたてている。それが風にふかれて、霧のように飛んでいく。おりた人たちは駅のなかにかたまりあっていて、だれも出ていこうとするものはない。

しかし、そのときのハジメとツギオには、あれるう雨と風とが、かえって痛快に思われた。ふたりは、すぐに、あたまをさげて、あらしのなかへ突進しようとした。だが、そのとき「ハジメ！ ツギオ！」と強くよぶ声がきこえた。顔をあげると、目のまえにおとうさんが立っている。みだれた髪の毛からは、しずくがたれ、レイン・コートの全身はずっぶり雨にぬれている。じっとふたりを見るやさしい目。
「おとうさん！」

ふたりは雨と風とのなかへ飛びだして行って両うでにぶらさがった。

ハジメとツギオは、レイン・コートの腹を大きくふくらまして、雨のなかに立ち往生した、その日のおとうさんの妙な姿を、いつまでたってもわすれることができなかつた。

ひげのおじさん

1

投手がヤマネ・フカシ、捕手がスミノ・スミオ、打者がババ・ゲンキチ。三人だけの野球だ。投手が一壘手をかねる。投げた球を打れたら、それをつかんでランナーよりさきに一壘へかけこまなければ、敵をアウトにすることはできない。一壘は投手板のまうしるにある。人数がたらないと、よく三角ベースというのをやるが、これは直線ベースだ。打者がアウトになると、投手が打者になり捕手が投手にまわる。打者だったものは捕手にならなければならない。こうしてじゅん・じゅんに役目を取りかえていけば、あきるといことがない。フカシたちは、もう一時間もまえから、この

遊びをつづけていたのである。

せまい横丁での野球だから、フライを打ちあげるとはキンモツになっている。なるべくゴロを打つようにする約束である。

ゲンキチは、さつきから、なかなかアウトにならない。二回もセーフになって、もう三回も打者のおつづけをやっているのだ。

ボール・カウントはツー・エンド・ツーだ。フカシは、こんどこそ三振にしてやりたいと思った。ふりかぶって力いっぱい投げた。あッ、高すぎた！ そう思ったとたんに、ゲンキチがバットがわりのタケの棒を振った。

球はバットからななめうしろへはねた。ファウルである。ああむいた捕手の顔をかすめて、三メートルばかりうしろ横の板ベイのなかへ飛びこんでしまった。

ゲンキチは、すぐかけよって、のぞこうとしたが、ヘイのしたにすきまはなかった。

三人はヘイのまえに集まって、とほうにくれた顔を見あわせた。

球が飛びこんだのはオガワといううちの庭のなかだった。このうちには、こどもがなかった。だから、三人のこどもたちには、まるでオガワさんのうちのなかのようすがわかっていなかった。ただ、ひげのはえたむづかしそうな顔をしたご主人が、朝でかけて夕がた帰ってくるのを、ときおり見かけるだけだった。大きなほうの門は、いつもびったりしまっていて、ご主人ですら、わきのちいさいくぐりから、ではいりをしてる。そういううちだった。

ボールの持ちぬしのスミノ君が、心配そうな目つきで、ゲンキチの顔を見た。すると、ゲンキチがフカシにいつけた。

「ヤマネ、門からはいつて、さがしてこいよ。」

ゲンキチだけが六年生で、あとのふたりは四年生だ。だから、ゲンキチは、いばつていつけたのだ。しかし、フカシにはそれが氣にいらなかった。フアウルを打つて、球をへいのなかへ入れたのはゲンキチではないか。それに、自分が一番上級生なのだから、ゲンキチがとってきてくれるのがあたりまえだ。そう思ったから、フカシ

はわざと返事をしなかった。

だが、ゲンキチはもうひと押し押してきた。

「おい、ヤマネ、とつてこいよ。きみがほうつた球が、へいのなかへ、はいっちゃつたんじゃないか。」

「ちがうよ。ババ君がフアウルを打ったから、はいっちゃつたんだよ。」

フカシは、足をふんばる氣もちで、やりかえした。

ゲンキチは、「なにをッ！」という顔つきで、フカシをにらみつけた。

スミノ君はだんだん心ぼそくなつた。もう、ボールが二度と自分の手にもどつてくることはあるまいという氣がしてきた。自分にしても、あの大きな門のくぐりをあけて、「ごめんください。」とはいつていく勇氣のないことがわかつていたからである。

スミオは、へいの上からあたまをのぞかせているモクセイのキンいろの花を、悲しそうにながめた。

しばらくは三人とも、ものをいわなかった。スミオが、ミットのまんなかを、みぎ手のこぶしでしきりにたたく。フカシは足もとにころがっている小石を一つ、むこうへポンとけとばした。

日かげが少しにぶくなった。まもなく夕ごはんの時間だ。

「こまるなアぼく。ボールなくなして帰ると、おかあさんにしかられるんだ。」
とうとう、スミオがひとりごとのように、ぼつんと、つぶやいた。

「じゃあ、スミノ君が自分でとりにいくんだな。もともと、きみのボールだもの。」
ゲンキチは、こんどは、まるでひとごとのようないいかたをした。
フカシはかツとした。

「そんなのないよ。ファウル打ったのババ君じゃないか。」

「じゃ、ファウルになるような高い球ほうったのだから。ヤマネじゃないか。」

その時、キラッと、フカシのあたまを明かるくひらめき過ぎたものがあつた。――球をなくしたのはだれでもない。いっしょに野球をやっていた三人なのだという考えである。

「わかった。球をなくしたのはババ君じゃないよ。」

「やっばり、きみだろう。」

すかさず、ゲンキチが口をはさんだ。

フカシは、はげしくあたまをふった。

「ぼくでもないさ。」

スミオが目をまるくした。

「だって、ぼくはあの時、球にさわりもしなかったじゃないか。」

「だれも、スミオ君だなんていってやしないよ。」

「じゃ、だれさ。だれがわるいのさ。」

「べつに、だれがわるいってことはないよ。でも、球をなくしたのは、ぼくたちみんな

なだよ。三人で野球やらなきや、ボールはヘイのなかへ飛びこまなかつたはずじゃないか。」

「ああ、そうか。そうだね。」

スミオは、ひどく感心した顔をした。だが、ゲンキチにはフカシのいうことが、いっとうわからなかつたらしい。

「そんならヤマネ、だれがボールをもらいにいくんだい。ぼくはいやだぜ。」

「ババ君もいなきやだめだよ。三人でなくしたんだから、三人でいくのさ。」

「三人で——。うん、それがいい。いこう、いこう。」

スミオは喜んで、いきいきした声をだした。

こうなつては、ババ・ゲンキチもにげるわけにいかなかった。三人はヘイについて門のほうへまわつた。

ところが、いざという時になると、こんどは、だれがさきにはいるかということが問題になつた。

ゲンキチが、門をあおいで、ぼやいた。

「いやだなア。はいつてから、なんていうんだらう。」

「お庭へボールがはいったから取らしてくださいって、そういえばいいんじゃない。」

「それなら、ヤマネ、さきへはいれよ。たのむから。」

「じゃ、きみが門をあけるんだぜ。ぼく、さきにはいるから。——みんな、きつと、

あとからついてこなきやいやだよ。」

そう、約束がきまつたので、思いきつたという顔で、ゲンキチがくぐりの戸に手をかけようとした。そのとたんに、くぐりの戸が、自然に、ガラガラッと、いきおいよくあいた。ゲンキチは、わつとさけぶと、あとを見ないで、逃げだした。フカシとスミオも、それにさそわれて、夢中で駆けだした。

いつもは、今ごろ、洋服をきてカバンをさげて帰ってくるオガワさんのご主人が、ちやうどそのとき、門のなかからでてきたのである。着ながしにステッキをついた散歩のすがたではあつたが、やっぱり、濃いひげがはえて、むづかしい顔つきをしてい

た。

自分がでてくるといっしょに、門のまえからこどもたちが駆けだしていったので、オガワさんは、ちよつとのあいだ、ふしぎそうに、そこらを見まわしていた。それから、ゆっくりとした歩調（ほちよう）で、今、ゲンキチが逃げていったほうへ歩いていった。ゲンキチと反対のほうへ逃げていたフカシとスミオとは、オガワさんのうしろ姿を見送って目を見あわせた。

「あア、びっくりした。」

まだ、胸をどきどきさせながら、スミオがいった。

だが、フカシは、せわしく息をしながらも残念そうにいった。

「あんとき、おじさんにたのめばよかつたんだのになア。」

3

あくる日の朝、フカシは郵便局へお使いにいった。きのう、ふいにご主人がでてき

たのおどろいて逃げだしたオガワさんの門前までくると、白い張り紙が目についた。半紙に濃い墨で、みごとな字が書いてある。

ゴム・ボールをなくしたこどもさん
はとりにきてください。うちにあず
かってあります。

十月十二日

オガワ

読んでみて、フカシはなんともいえない気もちになった。みんなが、あんなにこわがって、はいれずにいたのに、オガワさんでは、こんな親切なやさしいことばをかけた。さるんだ。

フカシは、すぐにボールをいただきにいかねければ、わるいような気がした。

門からげんかんまでつづく石だたみをふんで、ガラス戸の前で、「ごめんください。」と声をかけた。すると、思いがけなく、右がわの庭木戸があいて、きのうの、ひげの

ご主人がでてきた。タバコをくわえて新聞を手にししている。日曜で、きょうはおつとめは休みとみえる。

「ボールかね。」

「ここにこしながら、むこうから聞いてくれたので、フカシはたいへんたすかった。ええ、そうです。」

「ちょっと待っててください。」

木戸をあけはなしにしたまま、ご主人は引っこんだ。

うちのなかはしんとしている。フカシは息をころして待っていた。じきにおじさんはでてきた。

「はい、ボール。それから、これをあげます。」

おじさんはまっ白なボールと、小さな紙づつみをさしだした。

フカシはちよつと手をだしかねた。

「ボールはあらっておいであげたんだよ。それから、こっちはお菓子、だいじょう

ぶ、毒（どく）ははいってないから、安心しておあがり。」

おじさんは、そういって、愉快そうにわらった。わらうおじさんの顔を見ていると、ちよつともこわいところなんかなかった。

「どうも、ありがとう。」

フカシは、両手をだして、ボールとお菓子をいっしょに受けとって、ペコリとおじぎをした。

「きみはなん年生だね。」

「四年です。」

「そうか。ボールが庭へはいったら、またいつでもとりにおいで。」

フカシは、そこで、また一つおじぎをして、いそいで門からでてきた。

すぐに、スミノ君のところへボールを持っていきたいと思ったが、お使いの途中なので、そういうわけにはいかなかった。ボールをズボンのポケットへつっこんで、紙づつみのなかをのぞいてみたら、今どきにはめずらしいモナカが三つはいていた。

フカシは、郵便局へ駆けだした。

うちへ帰ると、ヒロシ兄さんがげんかんに立っていた。

「しま、バブ君とスミノ君がきたぞ。」

「あ、そうか。待っていてくれればよかったのになア。」

「なんだか、ひどくいそいで帰ってったよ。きみが帰ってきたら、スミノ君ちへきてもらいたいってさ。」

「じゃ、ぼく、ちよつといつてくるよ。」

フカシは、買ってきたハガキと切手をヒロシにわたしてうちを飛びだした。

4

ゲンキチとスミオは、スミオのうちの門のまえで待っていた。そして、フカシの顔を見ると、ゲンキチが、いきなり、大きな声でいった。

「おい、スミノのボール、ぬすまれちゃったぞ。」

「ぬすまれた。」

フカシは、あつげにとられてスミオのほうを見た。

「そうなんだ。けさね、オガワさんの門に紙が張ってあつてね——」

スミオは張り紙を見つけるとすぐ、ゲンキチのうちへ知らせにいった。それから、ふたりでフカシのうちへさそいによつたら、フカシは使いにいつてるすだった。しかたがないから、ふたりだけでオガワさんの門のところへいつてみると、もう張り紙はなくなっていた。変だと思つたけれども、勇気をだして、なかへはいつてきいてみた。すると、ひげのおじさんがでてきて、たしかに、きみたちのボールかとたずねられた。スミオが、たしかに自分のボールだと答えたら、おじさんはいつもより、もつとむづかしい顔をして、「ふうふ。」とうなつたというのだ。

フカシは、おしまいまで聞いていられない気がした。

「ぼくだよ。ぼくがもらつてきたんだよ。ぬすまれなんかしないよ。」

フカシは、ふたりのまえへ、ボールをつかんだ手をぐいとつきだした。

フカシの話しをすっかりきくと、ゲンキチとスミオはよろこんだ。そして、わけてもらったモナカを、うまそうにたべた。

しかし、フカシは、一つ残ったモナカを手を持ったまま、考えこんでしまった。――あんないいおじさんに、自分がどろぼうだと思われているのだっただらたまらない。その考えがフカシの心を重くした。だまされたのかもしれないと思っただら、おじさんだって気もちがわるいにきまっている。ことによったら、あとからいったゲンキチやスミオたちが、うそをついたと思われているかもしれない。これは、このまま、ほっとしてはいけない。ぼくらのうちに、不正直なことをしたものなんか、ひとりもないのだ。それをおじさんに知らせないという法はない。

「ババ君、スミノ君、もう一度オガワさんへいこう。」
「どうしてさ。」

ゲンキチとスミオが同時にきいた。

「ぼく、あんないいおじさんにどろぼうだと思われているの、たまらないもの。」



庭木戸のまえで、フカシが、いきちがいの話しをくわしくすると、ひげのおじさんは、さも、うれしそうにわらった。

「うん、それでよくわかったよ。どうも、きみたち、どの子も、うそをついてると思えないし、変だと思っていたところだ。それにしても、よく、わざわざきて、わかるように話しをしてくれた。お礼にいいものをあげよう。こっちへきたまえ。」

おじさんは、どこかから、古い本もののバットをだしてきて、芝ふの上で、それを振って見せた。きれいなフォームだった。

「さア、これを三人にあげよう。おじさんも、むかしは野球がだいすきだったのさ。」
そういって、おじさんは、もういちど、大きな声で愉快そうにわらった。

星とお金

1

澄みきったよるの空だった。その、暗いながらも、どこかに青みをおびた広い空に一面の星だ。なんという、うつくしさだろう。そしてまた、なんというたくさんの星だろう。

ハジメもツギオも、自分たちのあたまの上で、夜ごとに、これほど数多くの星がかがやいているものとは知らなかった。

「おとうさんが、すぐ見つけられるのはハクチョウ（白鳥）とカシオペアぐらいなものだよ。なにしろ、この星座早見（せいざはやみ）を買って、星座の名をおぼえよ

うとしたのは学生のころだったからね。もう、たいてい忘れてしまっている。」
おとうさんは、懐中電燈にスイッチをいれて、三人のあいだにおいてある、ふるびた星座早見を照らした。

三人は、物ほし台の上にゴザをしいて、すわりこんでいるのである。

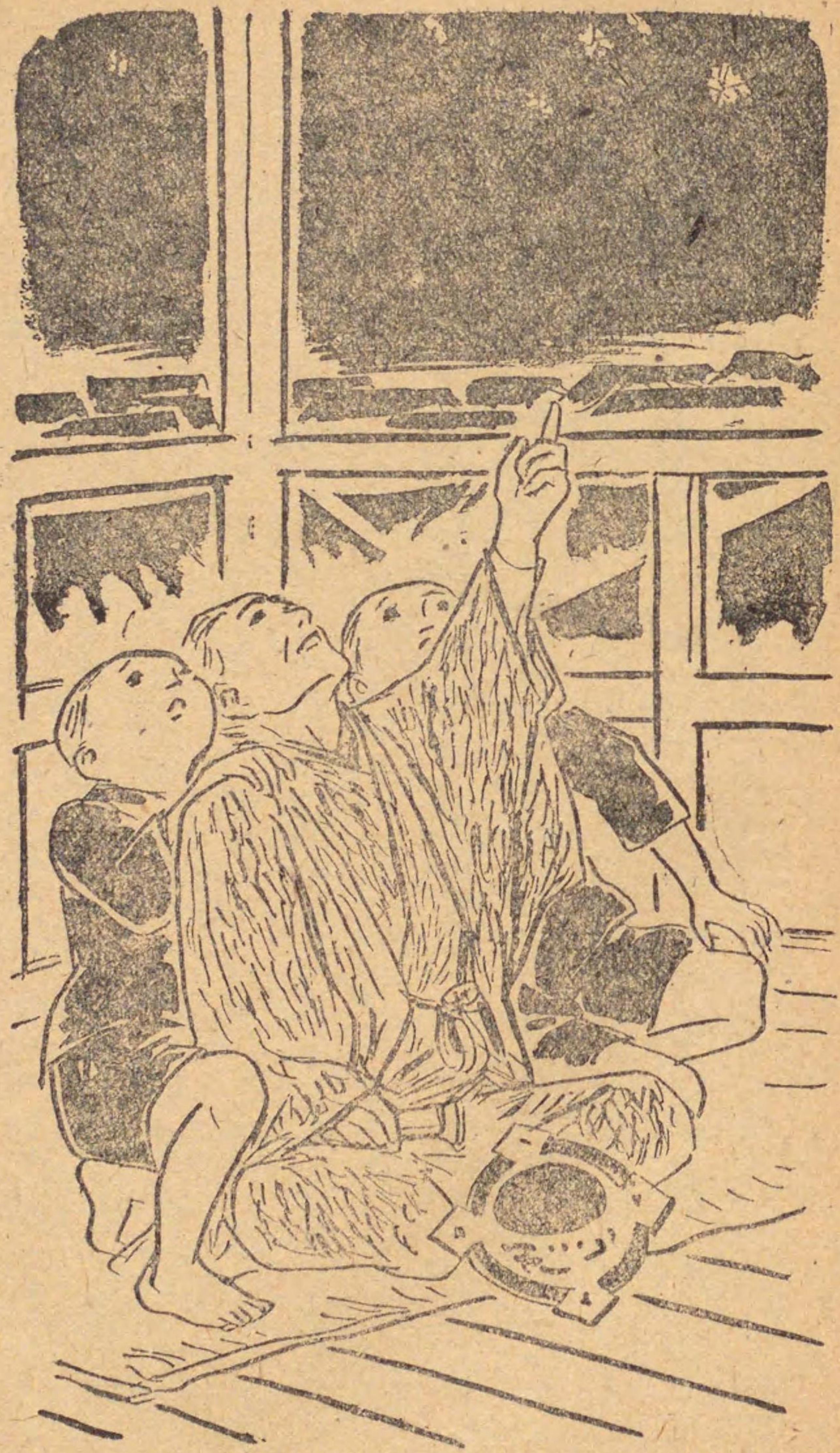
きょう、ハジメが、おとうさんの書齋（しよさい）のカベにかかっている、妙な私たちの星座早見を見つけだした。そして、なんに使うものかと質問したところから、こうして親子三人が物ほし台へすわりこんで、そろって星をながめるようなことになったのだ。

「いいか、この図を見ると、北よりの空を東から西へ銀河がながれているだろう。こいつは、だれにでもすぐわかる。見てごらん。」

おとうさんは懐中電燈を消した。

三人はいっせいに空をあおいだ。

「ある、ある。」



銀河は大きく空を横ぎって、白く光りながら、しんと静まっている。ふたりの少年は、いまさらのように、しみじみとそれをながめた。

「四月から六月ぐらいまで、東京の空では銀河はほとんど見えななんだよ。それはとにかく、空気が澄んでいるから、星を見るのは今だね、秋が一番さ。」

それから、おとうさんは、根氣よく、図と照らしあわせて、十字架（じゅうじか）の形をしたハクチョウ星座と、ローマ字のWの形をしたカシオペア星座を教えてくれた。

無数にまきちらされた星のなかから、教えられるままにいくつかの星を目でさがしだすことは、なかなかむづかしいことだった。しかし、いちど、それとわかってしまると、ふしぎなもので、ハクチョウはハクチョウ、カシオペアはカシオペアと、まぎれもなく、一つの全体として目につるようになってくる。すると、それらの星は急に、思いもかけない親しさで、一段と、うつくしい光りをはなつように思われた。

「ハクチョウっていいな、きれいだな。」

「ぼく、カシオペアのほうがいいや。首かざり見たいだね。」

ハジメとツギオはいつまでも見とれていた。

「あとは、ふたりで、さがしてごらん。」

おとうさんは、電燈をハジメにわたして、下へおりていった。

こどもたちは、おぼえたばかりの二つの星座を、あかず、ながめていた。もう、目をあげたばかりで、すぐ二つの星座のありかが、ハッキリ指させるのだった。

「にいちゃん、もっとほかの星をさがしてみない？」

「うん。」

ふたりは、電燈の光りを星座図の上におとした。しかし、ハクチョウやカシオペアほど、きちんとした形にならない星座は、ちょっと見あたりなかった。

「これにしようか。」

ハジメが「琴」と書いてある星座を指でおさえた。それは、たった三つの星ででき

あがっている、ちいさな星座で、見つけやすそうな形だった。

「うん。それ、なんていう星座なの？」

「コトっていうんだ。コロリン・シャンてひく、あの琴だよ。」

「ちっとも、琴みたいじゃないね。」

「きつと、西洋のタテゴトの形に似ているっていうんだらう。」

ふたりは、図の上で、コト座の位地を十分たしかめた。ハクテヨウのしっぽのさきから、すこし北へはなれたところにあつて、なかで一番大きな星は銀河のそとへはみだしている。

兄弟の目は、いっしょに、空へむけられて、ここぞと思うあたりをはいまわった。しかし、それは、ものの二分とわからなかった。

「見つけたっ！」

「あッ！ あつた。」

ふたりは、ほとんど同時にさげんだ。

星座早見には、今晚のこの時間には、どの星はどこにあるはずだということが、ちやんと示されている。そして、ほんとの空をしらべてみると、まちがいなしに、その通りになっているのだ。

人間はえらいもんだ。ハジメは、つくづく、そう思った。そして愉快になった。

「ツギオ、待っといで、いま、赤いエンピツ持ってくるから。」

「何をするの、赤いエンピツで。」

「ぼくたちの見つけた星だけ、赤くぬっところよ。」

「おとうさんにしかられない？」

「これ、ぼくらにくださったんだから、だいじょぶだよ。」

いいながらハジメは、立ちあがって、自分たちの勉強ベヤへおりていつた。

ハジメは、茶の間となりの勉強ベヤへはいると、すぐツクエのフデ箱をとりあげ

た。けれども、いつもそこへいれとく赤いエンピツは、見えなかった。引きだしへしまったのか知ら。そう思って、ハジメがツクエの引きだしに手をかけたときに、おとうさんとおかあさんが静かに話す声が、ふと、茶の間のほうからきこえてきた。「それはこまりましたね。」

「金がとれる道がみつかるまで、使わないようにするよりしかたがないよ。みんなで氣をそろえてさ。」

おとうさんの声は大してこまったような声ではなかった。しかし、ハジメはそれをきくといっしょに、からだじゅうの血が、いちどきに、さかさに流れだしたような気がした。あたまが、ガンと鳴った。引きだしのなかのノオト・ブックのあいだにはさんである赤いエンピツをぬきだしながらも、自分が何をしているのか、まるでわからなかった。

とにかく、足をしのばせて、いそいでヘヤをでた。

物ほし台へあがってくると、まだ立っているうちから、いきなり、ツギオにきかれ、

「にいちゃん、『コト』とちょうど反対の銀河のはずれのところに、よく光ってる星があるだろう。あれ、きつとこの星だよ。この字なんて読むの。」

黒地に白くぬいた字がかすれている上に、懐中電燈の光りがよわいので、それは、なんという字なのかよくわからなかった。あるいは、ハッキリ見えたにしても、むづかしい漢字のようだから、ハジメにも読めなかったかも知れない。

「にいちゃんにもわからないよ。なんか鳥の名まえのようだけど——」

「ぼく、ちよっと、おとうさんにきいてくらア。」

「およし、ツギオ。」

「どうしてさ。せつかく見つかったのに、その星の名まえがわからなくちゃ、つまんないんだもの。」

「ほかの星をさがそう。ペガサスだってアンドロメダだって魚（さかな）だって、ぼくらに読める星座の名まえが、まだいくらだってあるじゃないか。」

ハジメは、いま、ツギオをおとうさんのところへやったりしたら大変だと思って、一所けんめいにとめた。

うちにお金がなくなっちゃったにちがいない。そして、おとうさんもお金をもうけることができなくなってしまったのだ。それで、おとうさんとおかあさんが相談をしていらしたのだ。みんなで氣をそろえてお金を使わないようにするほかない。げんに、おとうさんが、そういつていたではないか。弟はなんにも知らないものだから、のんきに、星の名を教えてもらいにゆくなつていつていなければならない。

「ぼく、どうしたつて、あの星の名まえが知りたいんだ。ちよつときいてくるよ。おとうさんなら、すぐ教えてくださるにきまつていけるもの。」

こまつたことに、ツギオは、兄の氣もちを知らないから、がんこにいい張るのだ。「だめだよ、いまは。」

ハジメは、思わず、そういつてしまった。

「どうしてよ。」

ツギオは、すぐ、ききかえしてきた。

「どうしてでも。」

「いやだ、わけをいわなくちゃ。」

ふたりの、ちぐはぐになつた氣もちが、どこまでもつきまつた。大きな空、遠い星をながめて、のびやかに、ほのぼのとした思いにみたされているツギオの氣もち。うちにお金がなくなったということ、ちいさく、ぎゅうつとしめつけられているハジメの氣もち。話しをしていればいつているほど、このままではすまないことになつてきた。こんなことは、ちいさい弟にはいわないほうがよいのではあるまいか、ハジメのその考えが、だんだん、くずれかけてきた。

「ツギオ。」

ハジメの弟の名をよぶ声に変にあらたまつてきこえた。

「おまえ、エノグなんか買つてもらえないかも知れないんだぞ。」

兄の言葉があまり突然なので、ツギオは、あつけにとられて、返事ができなかつ

た。手に持った懐中電燈の光りが物ほしの柱と手すりをむだに照らしている。

「ぼくも、グローブ買ってもらうのやめにしようと思うんだ。」

「なぜさ。」

ツギオはいいながら、すっと懐中電燈の光りを消した。

「うちには、ツギオ、お金がなくなっちゃったんだぞ。」

「にいちゃんに、どうしてそれがわかる。」

「いま、下へいったらう。そしたら、おとうさんとおかあさんが、その話しをしてい
たんだよ。みんなで氣をそろえてお金を使わないようにしなければならぬって、お
とうさんがいってたんだ。」

ツギオは返事をしなかった。

暗いなかで、ふたりは、しばらくだまってむかいあっていた。

ハジメは肩さきが少し寒いような氣がしていずまいをなおした。

まもなく、ツギオの鼻をすすする音がした。

ふたりには関係なく、空にはあい変わらず星がきれいにかがやいていた。

3

よく朝、食事のとき、ハジメには、氣のせいかな、おとうさんもおかあさんも、いく
分沈んでおいでのように思われた。そして、いつもの朝ほど、ごはんがうまくなかっ
た。

兄弟は、カバンをかけて、いつもより心もちはや目に、うちをでた。

でるとき、げんかんのちいさいテーブルに、おかあさんのたしなみのしらギクの小
枝が、すがすがしい色を見せていた。いかにも、幸福な家庭のしるしのような、その
花の色が、きょうは、変にハジメの目にしみた。

往來へでて、ふたりつきりになると、ハジメがいった。

「ツギオ、どうする、うちにお金がなくなっちゃったら。」

ちいさい弟には、返事のしようがなかった。だまって兄の顔を見かえすばかりだ。

「あコメもおさかなも買えなくなったらこまるだろう。」

「そんなにお金なくなっちゃったの。」

「それはわからないさ。だけど、みんなで使わないようにしなければいけないって、おとうさん、いってたんだ。」

「ぼく、もう、なんにも買わないようにするよ。」

「エノグもかい。」

こんどは、ツギオはだまっていた。まだそこまで、あきらめることはできなかつたからだ。何しろ、エノグは、ずいぶん長いあいだおかあさんにねだって、やっと買っていただく約束ができたばかりのところだったのだ。

学校の門がむこうに見えるのと、ハジメが、ちよつと立ちどまった。

「きょうは、帰りにすこし話があるから待っておいで。いっしょに帰るから。」

帰りには、すこしまわり道をして、鉄道線路の土手のところへでた。そして、すが

れた草をしいて、ふたりは日なたに足をなげだした。

「ねえ。ツギオ。きつと、おかあさんもおとうさんも、ずいぶん心配していらっしやると思うんだ。」

そこまでいって、兄は弟の顔をじっと見て、しばらくだまっていた。それから、ゆっくりと言葉をつづけた。

「ぼく、これからぼくらはお金を使わないようにしますということを、おかあさんにいいたいと思うんだ。ツギオも、さんせいしてくれるだろう。」

ツギオはだまって、こっくりをした。

「エノグもいりませんというんだぜ。」

ツギオはおとなしく、また、こっくりをした。泣きだしそうな顔だ。それを見ると兄は強い声をだした。

「バカ！ 悲しいことなんかないんだぞ。」

ツギオは目をあげて兄を見た。

「ぼくらは、今までお金を使いすぎていたんだ。すぐアメを買いたがったろう。ノオトだって、まだ書くところがあるのに、新しいのをほしがったろう。エンピツだって、ちよつと短くなると、すぐすてたりしたじゃないか。こんなことは、いけないことだと思ふんだ。そういうことをやめればいいんだ。そして、エノグとグローブを買わないことにすればいいんだ。——そして、ぼくは、今までよりもっと一所けんめに勉強しようと思ふんだ。」

「ぼくだって。」

そういつて、ツギオは目を光らした。

「おかあさんにお話しするときは、ツギオもいっしょに話してくれるね。」

だが、こいつはツギオに自信がなかった。じつは、ハジメにも、これが一番むづかしいことだった。だから、弟の應援を求めるようなことをいいだしたのだ。

「ぼく——」

ツギオが何かいいだしたとき、ガーッと音を立てて、足の下を省線電車が通つてい

った。

「ええ？」

ハジメがききなおす。

「ぼく、おかあさんにそんな話するのいやだ。」

「だって話さなけりや、おかあさんにわからないじゃないか。」

「だって——」

ハジメはため息をついた。自分だって、ちゃんとお話しできるとは思えなかったからだ。

ハジメは、しばらく、草の葉を引きちぎっては投げ、引きちぎっては投げしていた。ツギオも、そのまねをしはじめた。

なん分かの時間が、おもつくるしく流れていった。——と、ハジメが大きな声をだした。

「いいことがある。手紙を書こう。おかあさんに手紙を書いてわたそう。」